
アトラフィリティ

田村 由良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アトラフィリテイ

【Nコード】

N2463G

【作者名】

田村 由良

【あらすじ】

アトラフィリテイ。そう呼ばれる塔を中心に持つ世界。一人の少女が願望を持ち、一人の少年がそれをかなえるため力を尽くし、そしてある日、塔に大穴が明けられた。それから幾年。塔からは魔物があふれ、戦乱の空気が世の中に漂い出した世界に、『喪失の子』の噂が流れ始めた

始まるその前のこと

川縁を金色に染めるほどの太陽光。しかしその光は明るくはあるが、猛々しくはなく、また暑くもない。うららかな、というにはやや温かみに欠けるような、程よい強さを持つ太陽光だった。

それゆえに、この川縁にいる者達は太陽光よりも、眼前で光り輝く川面の方に目をやる。

宝石の流れ、あるいは黄金の舞踏会。

ともすれば目を焼かれそうなそれは、美しくともけして自らの体の中に組み入れることのできないそれらの性質に酷似している。しかしそれらと違うのは、この宝石は自らの中に組み入れることのできる、命の輝きだということだ。

……………これなら、確かに飽きないわね……

川面を見つめながら、クルツ・フレインは感嘆のため息を漏らした。

河川敷とよぶには少し雑草が繁殖しすぎている、川の横。その斜面の頂上付近に立って下を見下ろす。

そこには春期休暇が近いせいなのか、それとも何か目標を見つけたのか、少しいつもより浮ついた雰囲気の間人たち、寝そべったり座り込んだり。全員普段の学校では自分を偽っているような人物ばかりなので、こうなるのは当然だろう。

「……………ところでみんな、この先どの道へ行くのかもう決めた？」

斜面をのんびり下りながら、クルツ。なんとなしに一番近い位置にいた、後ろに手をつけて座り込む少女に声をかける。

「レイン、あなたは？」

「私？」

きよとん、とした表情で私を見上げてくるレイン。

「うん。どんなことやりたいのかな、って」

「え〜と、ね」

川の方へ視線を戻す。

「私……………創造 クリエイティブ に進もうかな、って思ってるの」

とっさの対応が効かない性格なので一瞬戸惑ったようだが、いつも通りの落ち着いた返答を返してくる。

「……………意外ね。レインが 創造 へ行くなんて」

「うん、ちよつとね。霊薬に興味があるから」

淡々と自分の思考を語る少女の少し下から、

「レインが 創造 ? あれだけめんどろなの、レインにできるのか?」

少年が茶々を入れてくる。

レインはむつとした表情になり、

「……………じゃあダイモンはどこ行くの?」

少し険悪なレインの問いかけにも一切動じず、その少年、ダイモンは先ほどと同様軽薄な態度を崩さずに答える。

「決まってるだろ? 俺は 現象 フェイム ! 特に『焰』の 現象 だな。

一番派手で、面白そうだし」

「……………たしかに、ダイモンらしいわね。体力バカの熱血に炎なんて、ピッタリにもほどがあるわ」

「……………レイン、おめえ俺の『紅蓮』の餌食になりたいのか?」

「できるのならね」

急にむきになってきたダイモンをレインは軽くかわす。

「ところで、クルツはどの道に進むの?」

「わたし? わたしは 召喚 サモン 。一番楽しそうだし、龍族の召喚に興味があるから」

龍族の召喚は幻想種召喚の中でも最難関とされている。最も難易度の高い神族には劣るとはいえ、それでも難易度自体はとてつもなく高い。

「龍ね……………まあ、クルツらしくていいんじゃない?」

「そう?」

自分としてはあまりにも大きな目標に思えるものなので、こんな

風に真つ向から評価されるのは少し恥ずかしい。

「うん。昔から、クルツって龍の本ばかり読んでたでしょ？ だからたぶん、そう言うんじゃないかな。って思ってたの」

「あ、ばれてた？」

「思いつきり」

くすくす笑い出すレイン。

「あ、ところでディアはこの先……って、聞くまでもないか」

レインの言葉に、斜面の下の方に寝そべる少年が顔をあげる。

「相変わらず、『塔』？」

笑いながら言うレインに、その少年、ディアはにこりともせず、

「ああ。俺はこのまま学校を抜けて、『塔』に挑む。あそこ以外に俺の目標地点はない」

「……………『塔』って、いけると思う？」

あの年で『塔』なんて、無謀もいいところだろう。

「ああ。いけるはずだ」

やれやれ、とクルツは内心で思う。学校にも『塔』に固執する生徒は何人かいるが、あそこまで現実的に目指すものも珍しい。

思いながら、川面の向こう、はるか向こうの大陸の方へ視線をやった。

天を両断してそびえ立つ、それは塔……

幾年前からかは知らない。

しかし、あの『塔』ははるか昔から存在し、この世界にその存在をこの世界に示してきた。

内部に入る入口がまったく存在しない、得体のしれない機械を押し固めたような『塔』。その技術力は世界最高と呼ばれるヴィライノの国内全力をもつてして、説明はおろか理解することすらできなかったというほどのもの。その高さははるか天上まで届くといわれ、そしてその内部には天上にあるとされる都市、「フェリス」に住ま

うにふさわしいものだけが内部に入り、その秘密を除くことができるといわれている。

その塔の名を、「アトラフィリテイ」という。

ディアは、その秘に挑もうとしているのだ。

「天上都市『フェリス』に、俺は行く」

「……………ほかのことに、興味ないのか？」

「他のこと？」

「現象 とか……………結構な腕だろ、お前？」

「ちらり、とディアはダイモンの方を一瞥し、

「…興味ないな」

ほとんど即答した。

ああ、とクルツは内心でため息をつく。

知り合ってから、ほぼ三年間。その間、ディアの目標は全く変わっていないのだ。

『アトラフィリテイの秘を究明すること』

それ以外のことにまったく興味を示すことなく、いくら他の物に秀でてでもそれ以外のものを追おうとしない。

それが、クルツの抱いたディアという少年への認識だった。

「……………まあ、何の目的もないよりましだと思っけどね」

「確かに、な。ま、頑張れよ」

「……………」

明らかに自分のことを認めていないことが見て取れる返事であるにもかかわらず、ディアはまるで動じた様子を見せず、再び川面の見物に戻っている。

ずいぶんと落ち着いた人物だと思う。この年でこれだけほろくそに言われれば、もう少し反論も出てくるだろう。しかし、それすら出てこない。一体何を考えているのか、正直まったくつかめていないというのが現状だ。

「……………じゃあ、ロストは？」

これ以上ディアに突っ込んででも無意味だと感じたのか、レインが矛先を変える。

ディアのいる場所よりさらに下、斜面の終端部に寝そべる長髪の少女。雰囲気が総じてつかみどころがなく、ディアよりもはるかに謎めいた印象を受ける。

「……………何？」

その少女、ロスト・ハーネンフースがレインを視覚にとらえた。

一瞬、レインがたじろぐ。

虚無を映した、眼……………

あんなものいきなりさらされれば、誰でもたじろぐだろう。

「将来、どんな道に行きたいの？」

少し大きめな声で言う。距離を考えると、こうでもしないと届かないだろう。

「……………」

ロストは考え込んでいるのか、その「混濁の黒」の眼をあさっての方向へ向けている。

数瞬の間、そして

「
分からないわ」

そう言った。

わからない。

その意外な返答に、クルツは面喰らう。

ロストはディアよりもはるかに謎めいた、恐ろしく捉えどころのない人物である。しかしそれでも身の回りのことや自分のことなどはすべてこなせる程度の技術は持ち合わせているし、将来的なことにしても人一倍しっかりしてる。

そんな彼女が、自分の進む道が分からない？

あまりにも、意外な返答だった。

「漠然とした願望は、あるんだけど……どうも自分の行きたい道というのが、はっきりしなくて、迷ってるの」

「それって、どんな願望なの？」
と、クルツ。

「そうそう。それだけでもはっきりしてたら、ずいぶん違うんじゃない？」

楽観的に、レイン。

「最悪の場合、そのまま押し通すことだってできるんだ。それぐらひは、はっきりさせとこうぜ」

いつものごとく軽薄に、ダイモン。

「……………」

ディアは、初めから無言だった。

それらを目にして、

「……………」 私は、

ロストは、ぼつりと声を漏らした。

「私は、『母』になりたい」

「え？」

母になりたい？

それはつまり、子を残したい、ということだろうか？

こんな名門の魔術学校に通っていて、目指す先が母親？

いくらなんでも、それはないのではないだろうか。

「ロスト、それってどういう」

「ごーん ごーん

教会の鐘楼のような音が、町に鳴り響いた。

「あ、」

「お、」

「」

三者三様の反応。

無反応、約二名。

「夕食の鐘楼、なったね」

「ああ。そうだな」

「じゃあ、この話はもう終わりにして食堂、行く？」

あの学校の夕食は短い。せいぜい一時間と言ったところだろう。

ここから学校の食堂まで徒歩で二十分。

もたもたしている時間は、ない。

「」

「……………」

ロストとディアも立ち上がり、斜面を上ってくる。

もう撤収のころ合いだろう。あの二人が動くということは、それが賢明な判断だからだ。

「じゃあ、行きましょうか」

「……………そうだね」

クルツの声にレインがこたえ、一行は食堂向けて歩き始めた。

#####

どんな風景も時をたがえればそこにはまったく違った時間が広がるものだ。

静かな風だけが鼓膜を揺らし、春先の寒気が皮膚を切る。目の前の水面は金色の輝きを失い、寶石は炭へと転じていた。

その風景の中に身を置きながら、ロストはただ考える。

日の光というものは、つくづく炎なのだ、と。

最高の高度と最大の輝きを誇る霊石、ダイヤモンド。

光の中で最大の輝きを浴びるその存在であろうとも、炎の中に動じられてしまえば輝くことを失い、ただの炭へとその身を変化させる。

昼の絶景も、それと同じだ。

夜になれば、昼という火にあぶられた風景は炭になる。炭になつてしまえばそんなものに特別の価値はなくなり、ただの石ころとして扱われるようになるだろう。

それって、人にも言えるのかしらね……………

強すぎる輝きは、

その身を滅ぼす。

滅ぼされて、

夜になる。

「私も、夜になるのかしら……………滅びの光を浴びた、夜に」

ポツリつぶやいた、瞬間だった。

「夜なら、戻ってこられるだろう。」

朝になれば、な

「えっ？」

振り返る。川べりの斜面の上。

闇に慣れた目には、映る。

「……………母」になりたい、か。それがどういいう意図のもと紡ぎだされた願望なのか、俺には測りかねるが……………それが本物であるということぐらいは、わかるな」

言いながら、斜面を下って来る。

あまりにも見慣れた人影。

「いったい、どういう意図なんだ？ あの願望は」

「……………言っても、しょうがない。」

言ったところでどうにかなるような願望では、ないのだから。

「……………あなたにいつても、しょうがないでしょう。ディア・メイクライ」

その人影、ディアは特に表情を変えなかった。そのまま、斜面をゆっくりと降りてくる。

「つれないな、お前は」

斜面を下りて、芝の上を歩いて来る。

「まあ、そこがお前のいいところでもあるのだがな」

「……………どうでもいいわ。どうしてあなたがここにいるの」

「何、単純な散歩だ。いつもの場所へ来たくなって、来たらお前がいた。ただ単純に、それだけの話だよ」

無言で川の淵へ座り込むディア。そのまま身を後ろに倒すようにして両手で支え、軽薄な動作で肩をすくめる。

「そう　　なら、一人の散歩を楽しんで。私はほかの場所へ行

くわ。ちょっと、独りになりたいの」

「お前、笑わなかったらどう？」

振り返りかけていた足が、

ぴたりと、

とまった。

「……………なんのこと…？」

くくく、とディアは喉の奥で笑う。

「俺の願望、『塔』へ挑むことを聞いた時だ。はじめて聞いた時から、お前は笑っていないかったらどう？」

笑みを浮かべたまま、ロストの顔に視線を向ける。

「どうして俺みたいな夢の塊の願望を聞いて、笑わずにいられたんだ？」

「……………」

雰囲気にもまれそうになる。

夕方のディアとは、何もかもが違う。いつものディアを寡黙な獅子だとするのなら、今はまるで狩りにいそしむ前段階のような、とまずればこちらを狩られかねないような異様な雰囲気をもとっていて虎視眈々とこちらのすきをうかがっているような……………

「別に、他に同じ願望を持つてる人を知ってるだけよ」

「おまえは確か、ミドルの専攻は現象 だったな？」

ロストの言葉を無視し、まったく関係がないとしか思えないようなことを口にするディア。

「…それが、どうかしたの？」

「この間の全校統一試験の結果」

「……………！」

間違いない。

ディアは、気付いている。

確信して、思わず身を固くした。

「俺は基本的にすべての分野を全般的に上昇させるようにしている。そうしないと、到底『塔』に挑むなんて言ってもらえないからな。今回もそういう風にして、当然トップクラスにいるものだと思って結果を見たんだが」

一息。

「今回、ある分野で気になる名前を見つけたんだ。常にその分野に
いるはずのトップを差し置いて、てっぺんにな」

ミドルスクール
中等魔法学校。

その名の通り魔法を教えるこの学校に存在する分野は、三つ。

一つは 創造 クリエイト。魔力と呼ばれるものを使用し、無から有を創造する魔法。

一つは 召喚 サモン。己の力量を持ってこの世界に存在する生物、幻想種などに語りかけ、自らのもとに呼び寄せる魔法。

一つは 現象 フェイム。魔力を用いて世界に働きかけ、特定の現象を起

こす魔道。

これらの技術はそれぞれに特色があり、基本のものであれば才能のあるなしにかかわらずだれでも習得が可能で、ミドルもそれが分かっていてか、この段階から専門科目を教え始める。そして学校統一試験ではそれぞれの専門にかかわらず、「どれほど魔道に関して知っているか」を問い、そして各分野の知識量に応じて順位を付けるのだ。

つまり、試験においては専門的な内容も問われる。

自分の専門以外の分野において、トップをとることなど、まずあり得ないのだ。

「その分野は、 創造 ……………」

観念するしか、無くなった。

ディアは、すべてを理解している。

「そして名前は、ロスト・ハーネンフース。お前だ」

「……………偶然って、こわいわね」

「違う、偶然じゃない。それはお前が一番よくわかってるだろう？」

やはり、ディアはすべてを理解している。

そんなこと、もうわかってはいるはずなのに。

「いったい、お前は何を望んでいる？ 専門外であるはずの 創造に手を出して、いったい何を成したいんだ？」

「……………」

動悸が、自然と大きくなる。

話してしまっても、いいのだろうか。しかし話してしまつたところで、それに意味はない。意味がないならやらない方がいいし、それに万が一意味があつたとしても、それはきつと私に対する意味ではない。

視線を、ディアからそらした。

「……………あなたにいつても、分からない」

「わかるさ」

「何で言い切れるの？」

「俺もわけのわからない大きな望みを抱いているから
アトラフィリティを指すこと。」

確かにそれは、あまりにも大きすぎてかなえるのはとてつもなく
難しいと思えるような願望だ。

しかし、

「 あなたの望みと、私の望みは違う」

「何が違う？」

「あなたの望みは、このままでもかなえられる可能性があるじゃない
い！」

思わず声が大きくなった。

「私の願望は、今このままじゃどうにもならない。絶対に。それにも
もし今この状態から動いたとしても、限りなくかなえられる可能性
は低いわ。だったら、言っても言わなくても同じじゃない！」

言葉と感情が、流れ出す。

今までたまっていた感情、今まで鬱積していた感動、そう言った
ものが、一気に。いつしか動悸は今までにないほどの大きさとなり、
声は夜であるということは一切顧みないほどの音量となっていた。

「だから、あなたには話さないわ。あなたには、わたしにできるこ

とが何一つ

「あるぞ」

「え？」

言葉と感情が、止まる。

「いま　　なんて…………？」

ディアが、ゆっくりと立ち上がる。

「俺には、お前にしてやれることがある」
「一步、こつちに歩み寄ってくる。」
「だから、話してくれ」

ああ、やってしまった。

直後に、激しく後悔する。

誰にも告げることなく終わろうとした望みの一部を、こつして話してしまった。

話さなければ、何一つ知られなかったのに。

話して、しまった。

ディアの視線の方向性が、変わる。

先ほどと陰陽を逆にする、目に。

ああ、もう駄目だ。

あんな目にさらされて隠し通せるほどの強さなど、もっていない。
「……私の内臓は、壊れてるの。原因は、知らない。気になって城の書庫をあさったこともあったけど、見つからなかった。とにかく私の内臓は壊れていて……いくつかの能力が欠損してるの」

気づいた時には、言葉が勝手に流れだしていた。

流れ出せば、水は止まらない。

感情も、言葉も同じだ。

「……その中でも大きなのが、心臓。血液を送り出す機能が壊れてて、それを無理やり現象で動かしてる。生まれた時からずつとやってるから、今ではもう無意識ね」

ディアは、目をそらさなかった。

目をそらさずに、ただただロストを見つめている。

「けど、もうひとつ大きな機関が壊れてるの」

それは

「……言わなくても、わかるでしょう？」

私の、子宮。

私は、生まれた時から子どもを宿せない体なの……」

言葉は、もはや止まらないだろう。

初めて、だったのだから。

自分の言葉に、同情ではない感情で聞いてくれる人。
言葉に、とげを混ぜない人。

そう言った人の前で、自分の体のことを話すのが、初めてだったのだから。

「だけど私は、母になりたかった。母親になって、自分の手で愛する者を育ててみたかった。けど、私にはその能力がない。だから

「だから創ることにした」

「ええ……」

大きな夢だ。

そして、ある意味では最悪の夢だ。

「作るのは、私の内臓でも子供でも、どっちでもいい。けど、とにかく私は自分で子供を持ちたいの。子供を持って、最後の最後まで育ててみたい」

そこで、自然と顔が伏せられた。

「でも……無理なの……既存の魔道じゃ、命の創造なんてできない

だから、私の望みは……」

かなわない。

「かなうさ」

「……」

心中と真逆の意味をもつ言葉を、耳にした。

かなう？

本当に？

「いいか、ロスト。お前の望みがかなわないというのは、あくまでこの大陸、この世界においての場合だ。その場に手段が存在しなく

ディアに、
塔に挑むという夢を持つ彼に、すがっていた。
ディアは、ゆっくりと表情を和らげ、
うなずいた。

「ああ。お前が死ぬ前に『塔』にはいつて、お前が死ぬ前に帰ってくる。そうしたら、お前は自分の子供を持って、幸いに暮らせ。そのあと、俺は『塔』の上を目指す。
……これで、いいだろう?」

ディアの問いかけに、ロストは、
「……………うん……………」
素直に、うなずいて、

そこで初めて、ロストは自分が涙をこぼしていたことに気がついた。

#####

アトラフィリテイの外壁に、内側からの大穴があいたのは、それから五年後のことだった。

プロローグ side A

#####

保有生徒数、2000と444を数える、城を思わせるような巨大な校舎もつ『シャインド』最大の学術都市『ローブ』、その中枢たる魔道教育機関。

一見ただけではその建物は貴族の建てた道楽用の巨大な屋敷、あるいは王族の使用する別荘のようにしか見えないだろう。しかしその中身はと言えば、世界でも最大規模、そして最も良質な教育を行う、学術機関だ。

その名を『聖タリオン学院』という。

行われる授業はどれもこれも大陸トップと呼ばれる研究者、もしくは魔道師によって行われ、生徒の自主性もひどく高い。また、飛び級制度も存在するため、天才の発掘の可能性も大きく、その信頼度は王家のお墨付きと言ってもいい。

その、寮で

意識の覚醒は、いつも深海から浮上するかのような感覚とともに始まる。

生まれた時からのすべての記憶がそろっていて、自らを苦しめるものが何一つない意識の海の底から、ここ一年分の記憶しかない、内側から壊れ始めている苦しみの存在する意識の表層へ、浮上する。それはいうなれば、母胎ははからの別れの感覚によく似ているのかも

しない。

安全で温かで、苦しむことがない母体の中から、生きるという名の、苦しみに満ちた世界へ。

ただ作業のように、離れて落ちる。

ああ

ずっと、このままならいいのに

そんな甘えにも似た感覚を覚えて、
いつも、目を覚ます。

「……………ん……………」

暑くも寒くも暖かくも涼しくもない、しいて言えば少し暖かな空
気の中へ、意識が浮上する。

石作り、しかし壁の内装は木製で、かなり凝ったデザインの彫刻
が掘られた一室。部屋の端にはこの部屋の主が横たわるベッドがあ
り、そのほかには少し大型の机が一つと簡易キッチンにクローゼツ
トが一つ。ベッドのわきには木製の杖が一本と、刃の幅が広い、片
手用と思われる長剣が立てかけられていた。

部屋の主は明らかにぼんやりとした動作で身を起こした。

小さい。せいぜい身長は140センチより少し高い程度だろう。
それに合わせたかのように体系も全体的に華奢で、顔立ちも非常に
優しげな、例えるのなら花のような印象がある。髪は腰ほどまであ
る瑠璃色で、まとめないで放置していたためか、横に大きく広がっ
てしまっている。

「……………」

寝ぼけ眼のまま、その人物はベッドから降りる。足元は少し毛足

の長い絨毯で、きつちりと掃除が行き届いているため汚れの心配はない。

が、

「……………」
両足で絨毯に降り、体重がその細身の足にかかった瞬間、その人物がふらついた。

寝ぼけて、のふらつきではない。

明らかに、体が自らの荷重に耐え切れなくなったのふらつきである。

そのまま体重を支えきれず、ベッドに座り込んだ。

「……………」
無言で自身を叱咤し、ベッド脇、長剣の横に立て掛けられている木製の杖をとった。

絨毯に先端を沈め、体重をかけて立ち上がる。

「……………」
バランスの関係か、少しぐらついたものの、今度はすぐに立ち上がった。

部屋を横切り、クローゼットへ移動、扉を開けて中から着衣を取り出し、

こんこんこん

ノックの音に左、部屋のドアの方を振り返った。

誰だろう？

思いながらも杖を使いながら移動し、ドアの内鍵を外してドアを開け

ドコッ!

ようとしたところにドアから打撃を受けた。

当然、ガードなどできようはずもない。もろに顔面にドアからの打撃を受けた。

倒れなかったのは、ある意味奇跡かもしれない。それほどにまで強烈にドアが叩きつけられたのだ。

「……………あ、悪い。メル」

「朝からドアパンチ?…ガラム」

部屋の主、メルが鼻の頭を押さえながらドアを開ける。

そこにいたのは、少年だった。枯れ草色の少し長い髪、全体的に細身の体躯、室内だというのに少しよれた土色のコートをまとっている。そしてそのコートの内側にはひと振りの刀が見て取れた。

ガラム・バリウス。

それが、この少年の名である。

「いや、悪かった……………てつきりいつも通りの開け方をしたものだと思っ
つて……………」

いいながら、部屋に入ってくるガラム。当り前のように、コートはぬがない。メルもそれを特に注意したりすることなく、ガラムが入った直後にドアを閉めた。

再びクローゼットまで移動し、扉をあける。

「……………気配、つかめなかったの?」

「お前の魔力はかなり薄いんだ。普段では、まずつかめない」

薄紅色のシャツを取り出す。

「それならしょうがないけど……いちおう今度からは気をつけてくれる？ 最近結構回復してるときが多いから、毎回毎回ドアパンチじゃ鼻がいくつあっても足りないよ」

女性のようなすきとおった声で、メル。

「そう言えば、今日は珍しく起きていたな。いつもならこの時間は眠っているのに」

言いながら勝手に椅子に座り込むガラム。いつものことなので、特に気にはしない。

「うん。どうも最近は調子がね。一応今日も病院行くけど、ほとんど顔見せになるかな……」

言いながら寝巻の上を脱いだ。

クローゼットの扉の内側、そこに据え付けられた鏡に映っているのはまぎれもない少女の体躯だった。

なめらかな曲線を描く体のライン、男ではあり得ない柔らかさ、うっすらと丸みを浮かばせる胸部など、それは明らかに『少女』の肉体。

「

なんとなしに鏡を見ていると、ちょっとした視線を感じた。

「……………何？」

「いや、到底男とは思えないな、と」
クローゼットの中にあつた銅貨を一枚投げつけた。

「うわっと。いきなり何をする」

「変態」

「同性の体を見て欲情する趣味は持ち合わせていない」

「それでも」

「……………」

ガラムをたしなめつつ、シャツを着た。

後方のため息。

「……まったく、本当は女なんじゃないか、メル？」

びたり、と。意識していないのに手が止まった。

「……………分からないよ、そんなこと」

再び手を動かし、今度はしっかりと生地の細見のズボンを取り出した。

メルには、記憶がない。

過去一年前、具体的に言うところの学術都市『ローブ』近隣の海に流されてくるその瞬間よりも前の一切の記憶が、存在しないのだ。

自分の名前が何なのか、いったいどこから来たのか、両親はいるのか、どうして流されてきたのか、そう言ったことすべてを、覚えていなかったのだ。

さらに言えば、性別ですら分からない。一年間かけて本の微細な記憶が戻ってはいるのだが、その記憶の中で、確かにメルは『男』として扱われていた。しかし肉体的には、先ほど鏡に映っていたとおり『女』のものなのである。

つまり、分かっていることは皆無に等しい。

唯一言えることは、体内に謎の病を抱えているということ、そして世界の中心たる塔、アトラフィリテイの方角から流されてきたという、ただ、それだけ

「それで、用は何？」

ズボンを履きつつ、ガラムに。ガラムは特に口調を変えることなく、

「ああ、ちょっと仕事の手伝いを頼みたくてな」

「仕事？」

ああ、とガラムが立ち上がり、メルのもとへ。身長差が結構あるので、どうやってもメルが見下ろされる形になってしまう。

「と、言っても簡単なやつだけだな」

「どんな仕事？」

クローゼットから愛用の護身用ナイフを取り出し、帯刀する。

「町のチンピラの駆除。どうも徒党を組んで何かやらかすつもりになっているらしい。それが始まる前に止めてくれ、って」

「……………ランクは？」

「Bマイナー」

「……………報酬は？」

「6:4」

クローゼットを閉めた。

「……………」

少し、考える。

魔道学術機関において、実戦経験は必須である。研究を主立つて行う 創造 にせよ、生物関連研究を柱に行う 召喚 にせよ、各種現象に関する説明を行う 現象 にせよ、研究的な側面以外に、大きな側面があるのだ。

つまり、実践利用である。

当然学術機関である以上、種々多様な進路を確保しておく必要がある。

そこで必然的に必要となってくるのが、実戦経験をつむことが出来るカリキュラムである。

無論、世界トップクラスといわれる学術機関である以上、そこもきつちりと確保されている。

それがこの、『依頼』というシステムである。

実戦経験、あるいは金銭を必要とする生徒が民間から寄せられた依頼を任意で受け、それを遂行することで実戦経験と必要な金銭、そして学校自体の名前を挙げる効果を狙うという寸法だ。

難易度によってE～Sまでのランクがつけられ、それぞれにプラス、マイナスの微調整が行われる。

ちなみにBマイナーは難易度としてはやや高め、受ける学年は大抵の場合、五期生以上になるのが通例である。

その依頼を、

「…………… Bマイナー程度なら、簡単だね。やるよ」

二つ返事で、受けた。

「けど、援護程度しか期待しないでよ。丁度薬も切らしてるから、無理できないんだし」

「わかってる。前衛は俺が勤める」

「なら話は早いね。いつ?」

「今日中なら、いつでも。決起の準備が整うと、やりにくくなるが……………さしたる問題ではないだろう」

「確かに……………」

ガラムが立ち上がる。

「で、行動はいつから行う?」

「出来れば、病院行く前に何とかしときたい。それなら負傷しても

大丈夫だし」

「なら、今から行動するか？」

「え？ 今から？」

「……………なにか、問題でも？」

「いや、特にないけど……………急すぎない？」

「もともとそのつもりできた。当然だろう」

ああ、とメルは内心嘆息する。

ガラムは良くも悪くもマイペースな人物である。どれだけ不利な要素が存在したとしても自分で決めた事は最後まで突き通すし、それ以外の手段がどれほど楽なものだったとしても決めた手段以外は決してやらない。そういう性格なのだ。

そんな風に作用すればいい性格だといえないこともないのだが、今回のように間逆に作用してしまうと、到底動かないのだ。

あきらめて引き受けてしまったほうが、いいだろう。

「……………わかった。さっさと済ませよう」

ちら、とガラムのほづを振り返ると、案の定、微笑んでいた。

満足げな声で、言う。

「お前ならそういうと思っていた」

「……………」

「こんなくだらない仕事、さっさと済ませてしまっぞ」

「……………くだらないって思うなら、どうして引き受けたの？」

「退屈だったからだ。丁度金銭的にも不足していたし、報酬もいい。一人でやると、余計に退屈しそうだったから誘ったんだ」

「……………ガラムらしいね」

言いながらも部屋から出て、鍵を閉める。

さて、面倒な仕事は、さっさと片付けてしまおう。

プロローグ side B

学術都市、『ローブ』。

学術を中心とする町であろうとも、基本的な敷地や町並み、設備などは普通の都市とそれほど違ったものではない。川によって両断される町の東側を歩けばレンガ造りの家々が立ち並ぶし、西側を歩けば活気ある商店街が広がっている。住まう住人も学生関係の人間ばかりでなく、商業、工業なども研究機関から新しい情報がひっきりなしに入ってくるため普通の都市以上の発展を見せているし、そう言った技術関連の者にとっては最新技術の寄り集まった情報の総本山のようなところだ。

また、『塔』に関連する者にとっても、ここは重要な土地である。

アトラフィリテイ。

そう名付けられた『塔』は二十年近く前、大変革を迎えた。

外壁の一部に開けられた、内側からの大穴。

人の手によるものなのか、天上都市の者の手によるものなのか、あるいは『塔』の中の存在の手によるものなのか、そんなことは分からない。唯一つはつきり言えるのは、これまで自らの選んだものしか侵入ができなかった『塔』に、誰でも通行可能な出入り口ができたという、その事実だけ。

その事実には、世界は歓喜した。

無理もない、いままで限られたものしかその出入りを許されず、そしてその限られた者の極々一部しか戻ってくることはない、ほぼ完全な封鎖状態であったのだ。事実、世界はその穴が出現した直後、各国は喜び勇んで『塔』の内部に向かい、その中の秘を、そして天上都市が何たるかを知ろうとした。

成果は、ほとんどなかったと言っている。

そう簡単に、数千年という時を封鎖し続けた『塔』が、

その鎖を解くことは、なかったのである。

あふれたのは、『魔物』だった。

召喚 によって現れる幻想生物でも、もとより世界に存在した魔法生物でもない、正真正銘異形の姿をもった『魔物』だったのである。

虐殺だった。

『塔』に近づくもの、中に入ろうとするもの、外装に穴をあけようとするもの、そう言ったものすべてを、『魔物』は殺しつくした。文字通りの虐殺。感情がないかのように『魔物』達は行動し、勇み向かってくる男を切り捨て、叫び逃げまどう女を潰し、泣き母を探す子を食らいつくし、おびえ主を待つ生物たちを引きちぎった。

そして世界は気付く。自分たちが入ろうとしていたのは、ありとあらゆる知識の詰まった『林檎』ではなく、

ありとあらゆる害悪の詰まった、『禍の箱』だったのだということに。

『魔物』は『塔』を飛び出し、世界にあふれた。

そして世界の中に散らばり、『塔』に近づくものを殺し始めた。時に町に入り、時に野をかけ、時に家を壊し、時に城に押し入り、そして時に、町をひとつ、食らった。

このままでは、世界は終わる。

世界が、本気でそう思い始めていた時だった。

『魔物』どもに、小さな変化が起きたのは。

殺さなくなった。

あれほどの虐殺をおこなっていた『魔物』がある日を皮切りにま

まったく人を殺さなくなり、凶暴な原生生物とそう変わらなくなったのである。

まるで何かの目的を果たしたかのように、すべてが、ほぼ元の状態に戻ったのである。

そしてその時期とほぼ重なる時期から、人々の間でまことしやかにささやかれる存在が、あった。

『喪失の子』。

そう呼ばれる『塔』の申し子の存在の噂が、魔物の活動の停止とともに流れだしたのである。

『塔』の内部、その全ての知識が集う場所から漏れ出した知識より、生まれた子供。

その存在が、シャインド国の學術都市、ローブにいます。

町を歩く何気ない人々の中に混じり、生活を営んでいると。

そしてその存在とともに歩けば、決して『塔』に拒まれない、と。

いつしか噂は事実とすり変わり、そして學術都市ローブはこうも呼ばれることとなった。

『塔選択の街』

しかし、しかしだ。

どう呼ばれていようと、それは対外的なもの。内部に住む人間の生活には何一つ影響はなく、内側に住む人々にしてみればその噂など『ああ、どうもそうらしいね』程度にしか感じない。町の呼び名ひとつで変わるほど、日常というものはもろくないのである。

ぜいクローゼットと部屋の隅に立てかけられた極長剣^{グリーヴァ}、それとかなり大型の机が一つだけ。

「ダルン、朝だよ？ おきてー！」

「うぬ……………」

ベッド上の少年が一人の少女によってゆすられる。しかし少年が目覚める気配はなく、せいぜい呻いて意識を沈ませる程度だ。

「今日は朝から仕事、あるんでしょ！ だったら早く起きないと…

……………」

「……………ああ」

のっそり、とベッドの上の少年が身を起こす。

普通だ。身長はおよそ170センチ前後。体系は全体的に筋肉質で、顔立ちは少しすつきりした印象のもので、例えるのなら狼のような印象がある。髪は首まで届く程度の枯れ草色で、まったく手入れしていないのか、あちらこちらが寝癖になっている。

「おはよう、ダルン」

「……………おう、シヨル……………」

ベッド上の少年、ダルンがぼんやりとした仕草で頭を搔く。

「……………依頼は…共同だから向こう次第だつて……………」

「だったら、なおさら。いつでも動けるようにしとかないと、いざつて時に動けないよ」

「……………確かに、そうだな」

やはりぼんやりとした仕草でベッドから足を下ろす。異常に毛足が長い黄土色の絨毯に足が沈み込み、しっかりと体重を支えた。

「……………いつも悪いな、シヨル……………」

その少女、シヨルはゆったりと微笑み、

「うん。いつものことだし」

両膝に手を付き立ち上がる。その動作にまったく危なげはなく、むしろ何処か力強さを感じさせられる。

「……………朝飯、食べる？」

「うん。もう出来てるよ。ダルンの好きなフィリア豆に、メルベスのスープ。あと……………クリストパンが」

完璧な朝食の献立である。見た目どおり、かなり家庭的な少女だった。

シヨル・メラリス。

この少年、ダルン・マクラウドの同居人である。

透けるような白い肌に、ストレートロングの白髪、目は翡翠の緑。着ている着衣まで真っ白であるため、雪の中に倒れればまったく見分けが付かなくなりそうなほど、その全体的な印象が白い。

「……………じゃあ、着替えたらすぐ行くから、準備よろしく」

その言葉に、シヨルはにっこりと笑みを濃くした。

「うん。すぐに出来るから、早めにね」

「おう」

その返事を聞くが早いか、シヨルは微笑んだまま櫛のドアを開け、部屋から出て行った。

そのドアを見ながら、ダルンは落胆、失意ではないため息をこぼした。

「まったく　　いつものことながら、すっかりしてる……………」

…

言いながらクローゼットの正面まで移動し、扉を開けて学校指定

の制服を取り出す。

シヨルとダルンの同居が始まって、もう八年になる。

八年前に夜桜国やおうとハイド国の間で起こった、一つの戦乱。その戦乱のときに生じた何人もの孤児のうちの二人が、ダルンとシヨルである。

幸いにして、シヨルの親族はその戦乱とはまったく無縁の土地、遙か遠いシャインド国の首都、デバイツアにいたため生活に支障がなく、それどころか血縁的にはまったく無縁であり、たまたま戦乱の地でシヨルをちよつとしたことで助けた程度の縁しかないダルンを拾い、わが子同然に可愛がってくれた。

ローブのこの家は、そのシヨルの親族が与えてくれた別宅の一つらしい。二人のローブ転居を聞き、シヨルに与えたそうだ。

叔父にはつくづく頭が下がる。恐らく、今この家の存在がなければ、二人の距離はかなり広がっていただろう。

失ったものはあるけど、得たものは大きい、か。

寝巻きのシャツを脱いだ上半身裸の姿で鏡に映った自分の姿を見て、一人思う。

筋肉質な体。いたるところにある、火傷と斬撃の跡。それらを上回る、大きな欠損が存在する。

左腕。

その左腕は、肉体ではなかった。

鎧を思わせる、黒鉄の塊。

その左腕は、肩口から先が完全な義手だった。

「……………」

動作を確認するかのように、その左腕をぐるぐると回す。

動作に支障は、ない。むしろ普通の腕よりも滑らかな印象が伴い、

金属的な音も何一つ鳴ることがなかった。

「……………よし」

それを確認すると、制服のシャツをさっさと着込み、下も脱ぎ捨て制服を着用。寝癖を直すこともせずクローゼットをさっさと閉め、部屋の隅に立てかけられているグリーヴァをもって部屋を出る。

リビングのテーブルの上には、もうすでに朝食の皿が準備されていた。

当然のごとくそのテーブルには、もうすでにシヨルの姿がある。

「……………すまん」

「うん。いつものことだし」

テーブルに着きながら言ったダルの言葉を、シヨルは軽く流した。

「……………」

何も言わずに用意されているフォークを手に取り、皿に盛られた琥珀色の豆を突き差して一口。

こりこりとした食感、程よい甘み、緩やかな香り。それらの感覚はダルンにとっては日常の感覚で、それを痛感してようやく、自分にとっての朝が訪れる。

「……………旨いな」

「うん。おじさんたちが言ってたけど、フィリアでいい豆が出来たって言ってたから、試しにね」

「なるほど……………フィリアにしたら旨いよな、これ」

もう一つ、口に運ぶ。シヨルも同様に、一つ。

「フィリア地方って、出来でかなり違ってくるから、こんなもんでしょ」

「言ってる。去年のはひどかった……………」
「確かに……………到底豆とは思えなかったからね」

ちなみにフィリア地方というのはローブから見て東のほうに広がっている農村地帯である。主だった生産品はシャインド国の一般家庭の主食であるところの豆で、気候が年々安定しないため、その年の様相次第では最高級品にも劣らない品質のものから、最低品にも劣るとしてもないものまで、いろいろな意味で自然の恵みを味わえる土地である。

「ところで、話題は変わるけど今回の仕事ってどんなの？」
まさに唐突としか言いようのないタイミングで、シヨル。それに対し、特に動揺した様子も見せず、ダルンは言った。

「単純な不良の掃討。なんか、徒党組んででかいことやらかすらしいから、それが始まる前に止めてくれて」

「……………ランクは？」

「Bマイナー。けど、実質的には多分Cランク以下になると思う……………」

よくわからない、といった表情でシヨルがダルンの顔を凝視する。
「チーム依頼だからな」

「へ？ ってことはチームメンバーがものすごいのか？」

「……………ああ」

メルベスのスープを一口。かなり辛味が効いていて、パンに浸したほうがいいと判断した。

「……………誰？」

「メルと、ガラム・バリウス」

「……………え……………あの、二人？」

シヨルの表情に驚愕が見て取れた。

苦笑しながら、ダルンは続ける。

「ああ　あの天才二人だよ……………」

「それじゃあ、確かに心配要らないね……………」

同感、とダルンは内心思う。

どこの学術機関であろうとも、どんな分野であろうとも、それが本人の能力によるものであれば、確実に生じる存在がある。

天才。

あまりにも異様、かつ化け物じみた能力を持つ、人間であることさえも疑いかねないような能力を持つ人間、そういった存在。

メルとガラム・バリウスの存在はまさしくそれだ。

方や十四歳の少女じみた記憶喪失の少年。

一見ただけでは普通の少女にしか見えないその存在、しかし内に秘める才能は、まさに天才のそれである。でなければ、現在のあの人物の立場はありえない。

何しろ、もう最高学年なのだ。

最高学年、七期生。

本来、その手順に到達するためには七年の月日を要する。一年ごととに用意されている試験に合格し、また試験だけでなく実戦経験もある程度つんだ後にその成果が認められ、初めて進級できるのだ。それを、都合七回である。

入学年齢は最低十二歳、これがミドルの基本地とされている。

しかし、彼は違う。

いまだ十四歳なのに、まだ一年分の記憶しか存在しないのに、肉体的な欠損を抱えているのに、わずか数ヶ月のうちにその場所まで上り詰めた。

知力だけでなく、魔道の面でもその才能はすさまじい。

召喚、創造、現象。

通常であれば一つ専攻を決定し、それに向かって努力していくはずの三つの分野である。普通の人間、それもミドルの生徒となれば専攻できてせいぜいが一つ、余裕のあるものであっても、基本的な分野のみに絞って二つというところなのだ。

が、彼は違う。

彼は、あるうことが魔道三分野、その全てをマスターしてのけたのだ。

こうなると、もう人間というカテゴリーにくくれるような存在なのか、という疑問さえわいてくる。

方や十五歳の珍しい刀剣使いの少年。

一見すればローブのどこにでもいる普通の魔道学生にしか見えな存在、しかし内に秘める才能はその友人の少女同様、天才のそれである。

彼もまた、最高学年の立場にある。

その才覚の多くは魔道ではない方向に費やされているため、一概に魔道のレベルだけでその才能は測れない。

だが、それは単純に目立って突出した部分がないというだけの話。平均的に見れば、彼もまた、化け物である。

召喚、現象。

その分野を実践的に扱わせて右に出るものは、王国騎士団の内部でも片手で数えられる程度しか存在せず、そしてそれと併用して使われる剣技も、騎士団長クラスであるという。

それほどの実力を、有しているのだ。

成人した身でその実力であれば、優れた騎士という言葉で片付けられるだろう。

しかし、それが学生に過ぎない身分であった場合

その通称は、化け物というそれに置き換えられる。

化け物じみた魔道士と、
化け物じみた魔道剣士。

その二人と組んで、たかだか群れた不良程度に負けるはずがない。

「でも、他の心配はないの？」

「どんな？」

「足引っ張る、とか」

「ああ、そりゃちよつと心配だな……………」

言いつつ、かなりぬるくなったスープを飲み干す。

「あの二人がペアで、足引っ張るな……………そんなことできるの、

せいぜいこの町じゃ教師長マスターぐらいじゃねえか？」

「ダルン、普通にやったら初級ぐらいしかつかえないもんね、現

象 以外だと」

「……………いな」

確かに、それは事実だが。

専攻する分野である 現象 以外でダルンが出来ることといえば、

せいぜい 召喚 でインプ一匹、 創造 で花一厘が限度だ。 現

象 であればもう少し大規模で、家一件丸ごと焼き払う程度のこと

は出来る。が、それでさえせいぜい中級程度のもの。どれだけ詠唱

を長々と連ねようと、上級術には手が届かない。

当然、あの二人のように、上級クラスを呼吸するように扱うよう

な事など出来るわけがない。

どれだけ長い詠唱を行っても、それだけ強力な媒介を使っても、

どうしても中級以上に手が届かないのだ。

才能の、不足。

「……………まあ、剣術程度は役に立てるだろうけどな」

「うん。多分、そっちで役に立つと思うよ」

「そっちだけは、自信あるからな」

小さい頃から何度も剣の扱いだけは練習して来た。一応その分野だけならこの町での五本の指に入る自信はある。

「とりあえず、できる限りの事はやるさ。その後は、飯でも行こうぜ。5：5だし」

シヨルは思い切り笑みを濃くした。

「うん！ 楽しみにしてるから」

「はいはい」

少し苦笑しつつ、ダルンは残りの豆を一気に口に運んだ。

仕事の開始は、向こうから連絡が来ることになっている。メルは基本自分から動く性格ではないし、体調的にも問題があるため、そちらから連絡が来る事はまずないだろう。と、すると連絡はガラムのほうから来る、そのはずだ。

性格から言って、日が昇ってからだろう。

となると、まだ時間はあるそうだ。

もっ少しぐらい、のんびりさせてもらおう。

一章 第一話 広場（前書き）

長い間お待たせして、申し訳ありません……

一章 第一話 広場

どこの町でも、満足するものがあれば不満を抱くものもいる。

それはどれほど知名度の高い町であつても同様で、それはつまり世界的な知名度を誇る豊かな学術都市、ローブでも例外ではない。

ローブの町を南北に両断する大通り、その東側に広がる各種施設や学術機関、そしてそれらの必要とする資材などを大量に保管しておくための倉庫街のほぼ中心地点で、その会合は開かれていた。

入り組んだ路地を複雑に曲がった先にある、小さな広場。北と南に二箇所ずつしかない路地を考えると、恐らくは倉庫から取り出した荷物を一時的に置いておくためだけの広場。

そこに集っていたのは、明らかに粗暴な服装をした若者たちの姿だった。

その数、およそ30人。

それぞれが長剣やハンマー、魔術の媒介に使うであろう宝石などを手に取り、何かを待つかのように無言でたむろしている。それぞれの表情は無表情ではなく、それぞれがこれから自分たちが行う『何か』への期待、あるいはその末に待っている大きな罰、待機状態になつていふことへの不満などで顔をほころばせ、強張らせ、ゆがめていた。

どれだけ思慮の浅いものでも、その風景を見ればこう思うだろう。

そう遠くない時間に、この広場に集つているものたちは爆発する、と。

その風景を見ている若者以外の六つの目、三つの頭はほぼ同時にそう思考した。

「……………思ったより、多いな……」

「計算外、か。想定よりかなり人数も装備もきっちりしている

……………」

「みたいだね、どうする?」

広場に行く南側の狭い路地、その広場に至る直前の隙間から広場の様子を伺いながら、六つの目玉がそれぞれつぶやいた。

「どうするか、か………判断に迷うところだな」

言うのはガラムである。隙間にもたれこみ、腰に差した太刀の柄頭に手を置いて考え込むようにしている。

「どうするって 強行突破は無理なのか?」

その向かい側の隙間、奥側から身を乗り出して広場のほうを伺うのはダルン。背に背負った極長剣が壁にすれて音が出ないように注意しつつ、今も広場を伺っている。

「まず無理、だね。魔術をやるにしても近接戦を挑むにしても、数が多いすぎる。魔術の心得がないやつばかりだとそうでもないんだけど、何人かは明らか専門だよ」

冷静に分析するのはメル。寮を出るときには持っていないかった、少々短めの剣を腰に帯び、ダルンの体の下に収まるようにして広場を伺っている。

視線をそらさず、メルは続けた。

「それに、立地が悪すぎる。狭い路地、少ない出入り口に無数の迂回路。仮にこのまま飛び出して路地と広場の境目に立ったとしても、前に出るのは一人でいっぱい。おまけに向こうはこの辺りを把握してるだろうから、すぐに迂回されて挟み撃ちだよ………どうする?」

「それが一番の問題、か……………」
「けどそれって、逆に言ったら……………」

そう、そこが一番の問題であるという事は、そこさえ攻略してしまえば後はどうにでもなるということである。実力的には明らかにこちらが上手だ。なら、何とかして人数を減らしてしまうかこちらが優勢な状態にまで持っていく、あるいは三人それぞれで対応可能な人数まで分断させてしまえば、後は簡単になるはず
そこで、ふと思いついた。

「あ……………」

つぶやいたのはメル。

すぐさまその声に反応して残りの二人がメルのほうを振り向く。

「どうした、メル」

「なにか、考えでも…?」

メルはゆっくりと辺りを見回す。

辺りにあるのは、レンガ造りの倉庫の壁だ。かなり丈夫なつくりでちょっとしたことでは絶対に壊れそうにないほど頑丈であり、窓の類は遥か上のほうに取り付けられており盗難防止の役割を果たしている。

その壁、レンガとレンガの境目におかれた接着剤の役目を果たすラインに、メルは指を這わせた。

「ガラム、ダルトン」

指を壁から離し、指先を見る。

付着しているのは、乾燥した粘土砂だった。

「二人とも、この辺りの路地の地形、把握してる？」

続いてメルは足元に指四本を這わせた。

レンガも何も使われていない、むき出しの灰色地面。所々に見える赤銅色は荷物輸送の際に何度も擦れて現れた赤土だろう。

「地形？」

と、ガラム。

「一応、この周辺の路地は大まかに暗記してある。迷わずに走り抜ける程度には、だが」

「俺はからつきし。大体どの辺を走ってるのかはわかるけど、細かい道となると……………」

湿った赤土を触りつつ、メルは顔を上げた。

「OK…それなら、大丈夫だ」

いってメルは中剣を抜いた。

そしてあまりにも女性的魅力にあふれる笑みを浮かべつつ、剣を赤土のところへ突き立てる。

その様子を背後から何もせずに見ていたダルンが困惑の声を上げた。

「……………何を、するんだ？」

「そうだねダルン。いうなれば……………」

メルが顔を上げた。

「砂遊び、かな」

#####

「……………遅え」

広場の東側、そこに詰められていた箱にだらしなく座りつつ、青年、ハーヴェイ・カーラーはぼやくように言った。

手はずどおりに自分たちと同じ考えを持つ同志をこの広場まで集め、協力者と連絡を取って待機を言い渡されてから、もうじき二時間になる。その間この広場から出る事はまったく赦されず、それどころかこれから起こす行動の特性上どうしても静かに行動せざるを得ないので馬鹿騒ぎして暇をつぶすことも出来ない。

もともとハーヴェイは忍耐強い性格をしているが、今回ばかりは少しばかり限界だ。事情が事情でなかった場合、もうとっくにこの仕事はキャンセルされたものとしてやめている。

他の仕事にすりゃ良かったかな……………

内心でぼやいても、もう手遅れである。

一応ばれないように注意して行動してきたとはいえ、これから先は思い切り派手にやらかすことになる。そうなってしまった場合、ハーヴェイもその計画の中心人物として捕らえられることになるだろう。

しかし、それでもいいと思ったから、ここにいる。

すでに準備は出来上がっている。知っている限りの裏の実力者、学院から退学処分を受けた魔術師、元騎士団員、そういった人員に加え、いままで必死に培ってきた様々な魔術に、取引先が用意した武器や媒介の数々。あとはこの仕事を依頼した人物が最後の準備を

整えれば、完璧なのだ。

もう引き返す事はできない。この場で何者かが自分たちの行動を止めようと行動してこない限り、だ。

あとちよつと、あとちよつとで……

そう思ったときだった。

「……………」

空気に違和感を感じた。

違和感を感じた方向、自分から見て左、南側の路地のほうを伺う。そこには何も無い。ただここへ来るときに使った路地があるばかりだ。しかし

この違和感……………魔力？

学生時代に培った感覚を総動員し、探る。

間違いない。方向性は現象、媒介は剣、対象は不明。感知出来る出来ないぎりぎりの量だが、確かに魔力だ。

しかし、一体誰が？

すでにこの辺りの人払いは済ませてある。近隣の倉庫の中身は依頼人の力で別の倉庫へ移してあるから、この辺りに倉庫の所有主が来る事はない。なら学生の練習か？ いや、それにしても魔法の量の絞り方が手馴れている。極限まで絞りつつもしっかりと現象の形を保持しているし、魔法のレベルそれなりのものだろう。そもそも、そのレベルの行動を行えるのは七期生でも一部のものだけだ。それにきつちりで行える以上、練習を行う必要もない。散歩客がたまたま？ いや、こんな倉庫街の奥深くまでやってくるような物好きはいないはず。

なら、考えられる可能性は限られてくる。

自分たちと同じような行動を行おうとしているものが他にもいるのか、

もしくは自分たちを捕らえに来た敵か、だ。

まさか……

一瞬遅れで、ハーヴェイはその一点に思い至った。

学院の設定する、ある一つのシステム。

そのシステムが行使されていた場合、七期生レベルのものがやってくる可能性はあるのではないか、と………

「」

いやな予感を打ち消すため、立ち上がった。

そして何もなかったことを確認するために、自分の懸念が杞憂であることを確認するために南側の路地に向かって歩き出す

瞬間だった。

「なっ………!!」

まさしく、一瞬。

箱から降りて一步を踏み出したその瞬間、

足元が、まるで犬が水滴を振り払うかのような感覚で、『震』え、困惑と共に辺りの同志が振り向くまもなく震えが止まり、

そして地面が『はじけた』。

「……………!!」

まさに土砂の瀑布。現象の魔術によって一気に爆散させられた大地は、半ば南側の路地の入り口を塞ぐようにして広場に殺到し、その付近にいた者に対し、容赦のない石礫を浴びせる。

反応できたのは、恐らく偶然であろう。

事前に警戒できていなければ、恐らくハーヴェイであろうとも反応できず、その土砂の礫を全身に浴び、周囲の同志のように一気に行動不能に追い込まれていたはずだ。何とか咄嗟に発動させた現象の盾で礫をはじき返し、命中することを回避できたが、周囲の同志の半数が土砂の礫を回避できず、全身に打撲傷を負って動けなくなっている。

「っ」

わずかな憤りと共に土砂の発生源、南側の路地を伺う。

半ば土砂によって覆い隠され、地面の様子が完全に伺えないほどになっているそこにあったのは、わずかな魔力の残滓と、そして

路地の脇から突き出した、長剣の先端だった。

「！」

ハーヴェイは一瞬で理解する。長剣のに付着した土、先ほど感知したものとまったく同種の魔力の残滓、それらの情報を統合し、その長剣の持ち主こそが先ほどの礫の爆散を起こしたのだと。

ふざけやがって……！

押し殺した怒りに全身を震わせ、後ろを振り返る。

土砂の礫の被害にあったのは、広場の南側半分だけ。

広場全体に広がるようにして待機していた同志のうち、北側付近にいた半数はまだ健在である。魔術の心得がないものは呆然と、心

得があるものは唾然として、南側の状況を伺っている。

何の判断も下そうとしない同志たちに対して、軽い怒りを覚えつつハーヴェイは冷徹に言い放った。

「路地の中だ！ 魔術師がいるぞ！」

その一言で、冷水でもかけられたかのように同志たちが状況を把握する。そして一斉に状況を把握したことにより生まれたのは、

「そいつが今のを？」

「間違いねえ…魔力がある……」

「あいつら、まだ何もしてねえのにやりやがった……」

「ゆるさねえ 殺してやる！」

地に広がった油を伝うかのような、怒りの声だった。そして、それに答えるように一言。

「なら やってやれ！」

ハーヴェイがGOサインを出した。

瞬間、怒号と共に同志が一斉に南側の路地を目指しその先で走り去る二人分の人影を見た。

「おい…ム！ そ外だ！ 予想に多い！」

「わかっている！ は…げろ！」

何事を言い合いつつも走る人影二人。

その影を、ハーヴェイは同志の最後尾を勤めつつ追った。

一章 第二話 追走劇

隣にいた人間と一緒に大量の人間が出て行った後、路地裏にはただ静寂と…………

「よし、と。とりあえずはOK」

一人分の、つぶやきだけがあった。

つぶやきの主、瑠璃色の髪を背中に流した少女のような人影は眼前の地面に突き立った中剣を抜きとり、鞘に収める事はせずにそのまま身を隠していた小さな路地から左手の広場へ移動する。

広場は、見る限りでは完全に無人だった。実際は足元に広がる土砂、その下に半ば埋もれるようにして10人単位で生きている人間が存在するのだが、完全に気絶しているため動くことはない。

「……………やりすぎた、かな？」

言いながらも歩みは止めない。そのまま広場を横切り、広場の北側路地から再び狭い路地の中へ入っていく。そして左手を伸ばし、左右を覆うレンガ壁に触れ、

「……………材質はレンガ、すなわち土。魔術に対する痕跡は特になし、対魔力、低　これなら」

つぶやき、右手に持った中剣を逆手に持ち替え、振り上げ、突き刺した。

鈍い金属の触れ合う音と共に、中剣の先端が半ばほどまでレンガ壁、それを構成するレンガ同士を繋げる接着剤部分に埋まる。

そのまま人影は、その剣の柄を両手で握りこんだ。

そして、言う。

「《古の盟約に従ひ、わが求めに応じよ傀儡^{くわい}。約定によりて与へられしその命、わがために使ふ気概あるものはわが意思に従属するべし》……………」

言葉、そして魔力。

世界を己の思うままに操作するための力、その方向性を現すための言葉、その二つを与えられた世界はその命を実行せんと動き、そしてその言葉に従う。

意味するところは単純。

欲されているのは隷属する獣。

召喚。

「《土の体、岩の心、鋼の意思を持ちし形成す幻想よ、御言に従ひて顕現せよ。その名は猛き

#

「ガラム！ トップレベルってんなら作戦立案ぐらいもっとまともによれ！ あんなにいるなんて、聞いてない！」

「こちらだって失敗することぐらいはある。それよりも、これからどうするかを考えるべきだ」

「この状況でそんなことが出来るように見えるか！？」

「見えないな」

眼前で何事かをわめきたてながら走っていく二人を遠目に、ハーヴェイは半ば困惑しながら追跡していた。

不可解だ。

あれほどの魔術を行使したと言うのに、何故走り回る必要がある？

程度は第二幻獣域、無声詠唱、魔力抑制、さらには段階構築の速度まで完璧というレベルである。集中を要するそれらのことを完璧にこなすほどの術者であれば、この程度の人数に手間取るゆえんはないだろう。それこそ面倒な抑制や無声詠唱を行わず、先ほどの土砂の瀑布をもう一度行えばいい。

だが、何故行わねえ？

考えられる理由は、二つ。

一つ目は、先ほどの現象を起こしたのが術者でなく、魔道具であった場合。

この場合であれば、一応現状にも納得のいく理屈をつけられる。魔道具は基本的に使い捨てだ。一度は何かしらの魔道具であるレベルの魔術を行えたが、本人の力量では行えないため逃げ回っているが、どうも腑に落ちない。

情報が漏れて、同志たちを丸ごと借り出そうという動きが出たとする。その場合、魔道具もそれなりの数をそろえてしかるべきだ。わずかひとつで終わらせるはずがない。

そして二つ目。

眼前で逃げ回っている二人はおとりで、実際は別の術者が近場にいる場合。

もしこの場合なら、同志たちはひどく危険な状態にあることになる。あの現象を巻き起こした術者を放置したまま、相手の思い通り駆け回っていることになるのだ。

危険というなら、これほど危険なことはないだろう。

だが、

こうなってしまった以上、同志はもう止まらない。

今ハーヴェイに出来ることといえば、自らが最後尾を走ることによって背後からの不意打ちを少しでも軽減することだけ。

と、眼前を逃げる人影が右に折れた。

当然同志たちも、それを追って。

続々と同志たちは逃げる二人を追いかけてその路地に入っていく、そして逃走者はその先へと逃げ続ける。ハーヴェイも当然のようにバックアップとしてその後を追いかける。

「……………?」

右手の壁に、違和感を覚えた。

足を止めて、観察する。外見上はただのレンガ壁。位置相から考えて、恐らくは最初に待機していた広場の東側に広がっていたものと同じのものだろう。

違和感は、その壁から立ち上っている。

もしかして…

いやな予感がした。

それを打ち払うため、ハーヴェイはその壁に触れ……………

「……………!」

いやな予感が現実のものとなった。

眼前のレンガ、その暖かな感覚に、確かに覚えがある。程度は第一幻獣域、分類は製造生物、召喚の魔術だが、創造の流れをも含む特有の術式、そして何より、高度であるにもかかわらず、召喚のための陣を必要としない《ゴーレム》などに見られる特徴

「まずい!! 畏だ、もどれ!!」

ハーヴェイは絶叫する。が、その声は自分と同じく後方支援のために追跡していた冷静な数人には届いたものの、残りの大多数、怒りで我を忘れた者たちには届かない。

「……………っ！」

一瞬歯噛みしつつ、それでも何とか最悪の現状を防ぐため、ハーヴェイは行動する。腰から吊り下げている短剣を素早く抜刀、即座に逆刃に構え壁に突き刺し、柄を握りこんで集中。

そして、言う。

ただ一言、最悪の現状を招かぬための言葉を。

「……………《還れ》！」

サモンキャンセル
召喚停止。

これから発動しようとしている 召喚、あるいはすでに 召喚されている魔道生物を強制的に送り返す、そのための魔術。成功率は召喚者、停止術者の力量によって左右されるが、その 召喚 がまだ完全に発動の段階に至っていない以上、まだ手のうち用はある。上手くすれば 召喚 が発動する前に停止させられ、現状の追跡のみを続行できる

が、その儚い願望は、

「なっ……………」

一瞬で、砕け散った。
強すぎる。

ハーヴェイが押し返す力より、向こうの押しつける力のほうが、格段に強い。これでは出来てせいぜい召喚成立までの時間稼ぎ、それも数秒の猶予を作るのが限界だろう。

それを悟った瞬間、

「ちっ」

咄嗟の判断で、ハーヴェイは召喚停止を中止した。数秒間程度しか時間を稼げないのであれば、自分が突撃して召喚生物を始末したほうが早い、そう考えてのことだった。

短剣を壁から抜き取り、逆刃のまま構える。瞬間、それは現れた。

壁から生えるように召喚されるそれは、石像。

鋭利な鉤爪、人と犬を混ぜたような顔、その口に乱立する牙、丸まった背中、浮き出た背骨、強靱ながらも細い足、それら全てが、レンガの赤茶けた石で出来ている。

唯一石像と違う部分があるとすれば、その石像には生命があるということぐらいだろうか。

魔術により屋根の雨樋に作られていた石像に命を持たせ、番兵などの役目を持たせた魔道生物。その生成は 召喚 というよりもゴーレムの製造に近く、しかしそれ故に 召喚 の素材調達が非常に単純なことでは有名な、特有の生物。

その名を《ガーゴイル》という、石造りの魔獣。視認できるだけで二体の魔獣が、完全にどうタイミングで 召喚 されていた。

それが召喚しきられる直前、ハーヴェイは動いた。

獣のごとき速度で一気に距離をつめる。いち早くこちらの存在に気がついた手前のガーゴイルが爪を振るうが、姿勢を低くして回避。そのまま懐に入り込み、逆刃に構えた短剣をわき腹に突き刺す。石の塊に金属がすれる特有の感覚が確かな命中を伝えてくる、が、ガーゴイルのほうに目に見えたダメージはない。

それは当然だろう。ガーゴイルの全身は石、それに対して命を組み込んだだけの存在だ。体が欠損すれば行動に支障が出る事はあつ

ても、内臓器官も神経系統も存在しないため、ダメージも皆無に等しい。討伐しようと思えば、術者を倒すか、それとも完全に動けないほど全身をばらばらにしてやるかの二者択一だ。
だからこそ

わき腹に短剣が突き刺さったガーゴイルが爪を振りかぶったその瞬間、ハーヴェイは究極的なまでの高速度で短剣に小さな魔術を施し、短剣から手を離すと同時、後ろへ思い切り跳躍した。

前方へ流れていく景色、眼前を横切るガーゴイルの爪、もう一体の接近。

それらをまったく意に介さず、ハーヴェイは己の意識を内側へ向けた。
そして、

「《 黄金の翼、舞い降りる

翔けるは光、響くはさえずり

風も及ばぬ翼を持って、

滅びの木へと駆け抜けよ》！」

着地、それと同時に確認するのは敵の位置。短剣の刺さったほうは前方2メートル、もう片方は5メートル。足は俊足、届くまでに要する時間は多くとも5秒といったところだろうか。

が、獣の足であろうとも、

光の足には、かなわない。

ガーゴイルに突き立った己の短剣、そこを指差し、言った。

「……《雷鳥》……！！」

瞬間、目もくらむような強烈な光と全身をぞわりと撫で付けられるかのような悪寒が全身を走り、大音が路地を走りぬけ……

そして短剣を突きたてられたガーゴイルが『爆ぜた』。

魔術三系統が一角、この世の事象に干渉し、己の望みの現象を巻き起こす魔術。

現象。

世界に語りかけるかのような言葉、代償としての魔力、そして意味を示す媒介、それら三つをそろえ、己の望む現象を巻き起こす、それだけの魔術。詠唱、魔力、媒介の強さによっては町ひとつを焦土に変える事も、砂漠に湿原を作り上げること、あるいは人の傷を癒すことさえも可能となる。

が、それはあくまで現象であって奇跡ではない。町ひとつを焦土に変える程度ならまだしも、水の一滴も存在しない砂漠の真ん中を湿原に変えるのは不可能だ。

現象があるからには、そこに必ず原因が存在する。

それが、現象 という魔術の理念である。

大量の砂埃と共に、かつてガーゴイルの体であったはずのレンガ片が飛び散った。

視界は完全に砂埃で埋まり、音だけが世界の感覚の全てとなる。

その状況の中、ハーヴェイは警戒と共に辺りを見回した。

目に見える範囲に影は、自分と同志のものを除けばわずかに一つ。恐らくはもう一体のガーゴイルなのだろうが、そのシルエツトは前腕の部分が極端に欠損し、もはや動くこともままならないようだ。

「……………」

砂埃の中、無言でハーヴェイはその影に近寄る。まだ戦う意思があるのか、地面から起き上がることも出来ないガーゴイルがその牙を剥き、威嚇を行うかのように顎を動かすがもはやそれは敵として認識するにも足りない。

無言のまま、瓦礫片の中に転がっていた自らの短剣を拾い上げた。

路地に風が吹き抜け、砂埃が晴れる。それと同時にハーヴェイは振り返り、啞然とした表情でまだうごめくガーゴイルを見ている二人の同志に声をかけた。

「……………まだ仲間がいる。さっきの瀑布も、恐らくはそいつのやったことだ。あの二人は同志に任せて、俺たちは術者を探すぞ」

完全に感情を押し殺した声とは裏腹に、その表情は憎悪そのものだった。

今まで走ってきた路地を振り返り、

「探し出して……………痛めつける……………」

その声にうなずいた同志二人と共に、ハーヴェイは走り出した。

#

「……………そろそろ、か……………」

「…の、ようだな」

ダルンと共に、ガラムは後ろを振り返った。

相変わらず追いかけてくるのは多数の武装集団。先ほどから何発か炎弾や氷塊が飛んできてはいるが、狙いの定まらないものばかり。完全に冷静さを失っているのか、見える範囲にいる魔道具を所持しているものもただ追いかけてくるばかりでそれらを使ってくることはなかった。

メルから指示された事は、三つ。

一つはメルから援護が来るまで一切の攻撃を行わず、指定された方向へ向かいながら逃げ回ること。

一つは指定された場所へ到着し次第、全力を出すこと。

あと一つは、もつと単純だった。

「…目標まで、あと数メートル程度。この先の路地を曲がった先だ。

援護はまだ

瞬間、後方で悲鳴が上がった。

「…じゃない、みたいだな」

もう一度振り返る。

二人を追尾してくる集団の遙か後方、集団の最後尾辺りを構成する集団が、宙を舞っていた。

現象、ではない。

その動きは完全に自然界の法則にのっとったもの。重力に反して浮上しているのではなく、重力を超える力の作用によって無理やり浮上させられた、平たく言えば何かに投げ飛ばされたかのような動きだった。

人ごみに遮られているため、そこに何がいるのかをうかがい知ることができない。

が、二人にははつきり言える。

メルの援護、何らかの 召喚 によるものである、と。

後方襲撃のための二体、集団突撃のための二体、それによる同時援護。これだけの人数になれば内部にまぎれられた場合対応が効かなくなることを利用した、メル発案による援護。奇しくも後方から襲撃する予定だった二体はハーヴェイの手によって破壊されたが、それでも効果はてきめんであったようだ。

「ガーゴイル……………それも二体、か…相変わらずたいした腕だな、メル…」

ガラムはつぶやき、

「すごい、よな……………あんたら二人…」

ダルンは啞然とした風に言った。

眼前に迫った十字路、その道を右にむけて折れる。

その先は、行き止まりである。にもかかわらず二人は一切足を止めることなく壁面のすぐ正面まで走り抜け……………そこでようやく追っ

てくる集団に向き直った。

「目標地点、到着だ」

「ここからは、全力だったよな？」

言いながら二人は己の武器、ガラムは腰に帯びた太刀を、ダルンは背に背負った極長剣を抜いた。

そして、迫ってくる集団に向かって構えた。

「ああ、全力をもって相手しろ…ただし、」

「わかってる。メルの手指示を守れ、だろ？」

何か言いかけたガラムを制し、ダルンは極長剣を後方に振りかぶった。

メルの手指示の最後の一つ。それはある意味においてはひどく簡単で、ある意味においてはひどく難しい。

その内容とは

「一人も、殺すな…ね…」

振りかぶった極長剣に魔力をこめつつ、ぼやくようにダルンは言った。

「さすが王立騎士団も一目置く学院トップ…言うことが…違っぜえ!!!」

その指示をわかっているのかいないのか。

魔力をこれでもかといめられた極長剣を、ダルンは投じた。

#

路地の中で、地面を抉るかのような大音を聞いた。

「…始まった、か……」

つぶやきながら突き刺していた中剣を抜く。短剣と長剣の中間サイズのはずなのに、なぜかメルが握ると長剣サイズのように見えてしまうのは身長の違いさゆえだろう。

抜き身のまま中剣を携え、路地を移動する。広場と路地の境目の辺りから、その先の十字路を挟んで向こう側の路地へ。

「けど、便利な構造してるね、この裏通り……」

つぶやきながら、今度はその建物の壁に中剣を突き刺した。

激しく密集したレンガ造りの倉庫によって構成された、複雑な路地通り。学術都市に存在するほぼ全ての施設の倉庫が集っているためその密度は異常に高く、そして構造も少し特殊になっている。

そう、それぞれが必要とするスペースが広すぎるため、倉庫と倉庫の間にあるはずの隙間がない、もしくは完全に一つの建物として機能してあるのである。

完全な密着、もしくは同化。それによって作り上げられたこの路地の迷宮の壁は、突き詰めれば数にしてわずか五つの建物によって構成されているとさえ言えるような構造になっているのである。

おかげで、

「援護がしやすくてしかたがない、と……」

つぶやきながら中剣の柄を握りこむ。

そして想像する。材質はレンガ、状況は壁から据付状態、目的は登頂、維持時間は30秒。

そして創造する。壁を拡張、段差を作り、ある程度の強度を維持、魔力の量は少なめに。イメージは壁の中に自らの手を侵入させ、目標点、なにやらやけに大雑把な魔力が暴れている場所のすぐ後ろの壁まで伸ばし、粘土をこねるような手軽さで壁を変形させる。

魔術三系統が一角、無から有を、有から形を作り出す魔術、創造。

あるときは魔力に形を持たせ、形に力を持たせ、力に意味を持たせることで無から有を製造し、

あるときは形に無を、無に形を持たせ、己の望む形に変形させる。それが、創造 という魔術。

「けど、なんだか……」

創造 を続けながら、メルはつぶやく。

不可解、だね……

敵の行動に、統率が取れてなさすぎる。

もともと集団になることに向いていない人間たちばかり集めた、とは言ってもそこにはそれだけの人数を集めた中心人物、有事の際に指揮を執ることになるリーダー的な存在がすべからく存在しているはずだ。その存在しない集団は集団でなく、単なる人の寄せ集めだ。

それに……

あの人物。

広場において初撃を行った際、発動よりも前に動いていた青年。発動前に気がついた、という事はあの極限まで絞った魔術の行使直前の魔力を感知したということだ。

それに加えて、あの現象。咄嗟のタイミングで展開させたに
しては、規模、強度、魔力量、全てがあまりにも整然としている。

ガーゴイルも、破壊されたし……

ガーゴイルの感覚を通して実感した。短剣の中に仕組まれた、「特定の属性にのみ反応し、一気に魔力を膨張させる魔術」。本来ならば陣の中に仕組み、術式の補助として使うべきものを短剣に仕込み、そして膨張した魔力をガーゴイルの中に叩き込んで爆破、破壊する手法。

よほどの機転がなければ、この方法は思いつかないだろう。

「……………何もなければ、いいんだけど……………」

思いながら 創造 を完了、中剣を壁から引き抜き、鞘に収め

「……………見つけた……………」

る、その直前。

走りこんでくる三人分の足音、それと同時に青年の声を、聞いた。

「……………」

ゆっくりと、中剣を片手に携えたまま振り返る。

「ふざけたマネしやがって……………お礼はさせてもらうからな…魔術師
！」

最初の広場、その南側入り口。足元に山成りに堆積した土砂の上、そこに、その青年は立っていた。

怒りに満ちた表情、砂埃にまみれた服装。全身から漂ってくる威圧感はその姿のためでなく、恐らくは怒りによって膨張し、制御できなくなつて漏れ出した魔力のためだろう。右手には逆刃に構えた短剣を握り、全身は怒りによってか細かに震えている。

「……………」

その人物に対し、メルは無言で対峙した。中剣を背後に流すように構え、その青年を見据える。

やっぱり、こうなつたか……………

ゆっくりと自らの内部に意識を向け、タイムリミットを確認する。

……………大丈夫、まだ、いける。

「……………名前ぐらいは、聞いといてやる……………名乗れ！」

短剣を順手に構えなおし、こちらに突きつける青年。

メルはその姿を見て、

「…………メル。それ以外に、名前はない」
身を深く沈め、中剣を構えた。

「それで、君の名前は？」

「……………」

青年は無言で身を深く沈め、

「ハーヴェイ……………カーラー！」

砲声のような名乗り上げと共に、メルの砂の山を一気に駆け下りた。

一章 第三話 広場の戦い(1)

#####

好戦的な性格してる…っ！

思いながら、眼前の山を下ってくるハーヴェイと名乗った青年に
対し、メルは右手に手にした中剣を中段に構え、相対した。

もともと直線的な拳動というものは、反撃の手を打ちやすい。

行動が直線的であれば、その攻撃の性質がどういうものであれ、
加速によって得たエネルギーを生かすために常に正面に放たれる。
加えてその加速のために使った道が斜面であった場合、敵の反撃に
対して回避という行動を選択できないがために相手を押しつける必
要性が生じ、もっとも勢いのある攻撃である直線攻撃以外を放つこ
とが出来ないという自体が発生するためだ。

言い換えれば、命中した際の威力は高いが、反撃に対して対応で
きる幅が大幅に狭まってしまふということ。

ある程度の腕があると認識したものに対して攻撃するような行動
ではないということだ。

だからこそ、

ハーヴェイの殺傷圏に自らの体が入ったと認識した瞬間、メルは
ハーヴェイを飛び越るべく、跳躍した。

「……………！」

魔力を用いた身体能力強化、それによって得た人外の跳躍。

空中で回転しつつ、ハーヴェイの表情に驚愕が走っていることを
メルは認識する。その表情は完全に意表を付かれた人間の浮かべる
ものそのもので、しかしそれでもハーヴェイの足が止まることはな

く、空ぶった姿勢そのままに前方に大きく身を投げ出して

そして跳躍前、メルが立っていた場所が爆散した。

土砂の山によって生じた死角、その左右から飛来した炎弾によつて。

……………やっぱりか…！

思いながらも長髪を翻し、着地すると同時に中剣を左脇に振りかぶり、

「……………《飛べ》！」

言葉と共に右へと振りぬく横一線を放った。

言葉の示すとおり、放たれたのは斬撃軌道に沿った『飛来する斬撃』。斬撃は土砂の山の上部を切断して飛び、炎弾の放たれた位置二箇所を通過する。

それと同時に山の陰から転がるようにして現れたのは二人分の人影。手には棒状の何かを手にしており、そこから薄く煙が立ち上っていた。

……………魔道具！

種別、クラス、方向性、そういったものが情報として次々に脳裏によぎっていく。が、その流れを本能は強制的に中断する。

本能が告げる危機、その方向は、

……………後ろ！

ひざを軸として、振り返る。

瞬間、防ぐように構えた中剣に短剣が叩きつけられた。

「くっ！」

つぶやくと同時、ハーヴェイはメルから距離をとるようにバックステップ。追撃するべくメルは流れるような拳動で前へ。そしてその勢いのまま、追撃の横一閃。

短剣によってはじかれ、ハーヴェイの後方一回転。そして強く地面を踏み、

「……………」

跳躍と同時に一閃が飛来する。

見切れない攻撃では、ない。そのまま中剣で受け止めない。

剣の腹で滑らせるようにしてその力を全ていなしきり、自らは相手の懐へ飛び込む。

そして飛び込む直前の所在地に対し、今度は落雷。土砂が飛び散り、一瞬だけ視界が奪われる。

その隙を逃さず後方、回転しながらの横一線が迫ってくる。

……………避け

前方に無理やり体を傾け、

……………きれるか!!

短剣が自分のまとう布一枚を切り裂く感触と共に、体が前方に倒れ、どうにか短剣を回避する。かわしきれなかった場合の結末に冷や汗を掻くが、のんびりと認識している暇はない。

僅かに一秒足らず、その間を持って身を跳ね起こし、後方へ振り向きつつ中剣を振りかぶり、

「《飛べ》!!」

再び放った飛刃は回転しながら姿勢を戻そうとするハーヴェイへとまっすぐ向かい……………

「《雷鳥》!!」

着弾する寸前、ハーヴェイの右手から放たれた『形を持った雷』によって相殺された。

援護魔術を多用していた二人もハーヴェイの横に並んで相対し、三対一の構図が完成する。

…… やりにくい。

中剣の切先を三人の中央、ハーヴェイに向け、後退しながら内心で一人ごちる。

一歩攻め込めばハーヴェイによる迎撃が待ち、ある程度攻め込めば魔術による援護で阻害され、追撃でさえも封じられる。

…… 時間も、ないし……

自分の内側、内臓器官のあたりに意識を向ける。

そこは、重い。金属でも埋め込まれているかのようにずっしりとした気だるさ、意識を向けなければ気づかないような僅かな痛みが、確かに存在している。

…… だったら……

内心で次の手段を模索しつつ中剣を中段に振りかぶり、後方に進めていた足を止める。

…… 恨まない、でね。

思った瞬間、

メルはその身を躍らせた。

#####

「……………」

神速の拳動、猫を思わせる素早さ。

それらの中から放たれた神速の横一線を、ハーヴェイは逆刃に構えたままの短剣ではじき返した。

メルの胸が開かれる。

…………… っっ！

疾風のごとき挙動で鳩尾を狙って突き込む。が、その動作は柳のようなしなやかさで切り返された中剣により右方向へと流され、逆にこちらの隙を露呈させる結果に終わる。

切り返し。

寸でのところで回避。

そのまま回転動作に乗せての斬撃、下方向からの一閃で跳ね上げられ、胴に蹴り、回転を続けて背後を取って回避、向こうの回転動作での斬撃。

「……………くっ」

後ろに踏み込んで距離を開ける。

この間、僅かに五秒足らず。

六秒目には再び、今度はこちらから踏み込んでいる。

再び響く無数の剣戟音。

リーチの差、威力の差、体格の差、そういったものは全て勝敗の要因にはならず、ただただ速さのみが生死を分かつ。

ハーヴェイの短剣が疾風のそれならば、

メルの中剣は迅雷のそれである。

短い腕、つたない筋力、短剣よりも長いリーチ、それらを完全に埋めてなお、相手を圧倒してしまうだけの速度には、それだけの速さがあるだろう。

更にメルはハーヴェイとは異なり、同志からの援護魔術を全て受けきっている。

降り注ぐ雷撃も飛来する炎弾も、揺らぐ地面でさえも自らの障害とせず自分と渡り合ってしまう。

……………こいつ……………

一瞬の気の緩みも赦さぬ斬撃の雨の中、ハーヴェイは内心で思う。

……………化け物か！

必殺、そのつもりで放った斬撃が再び弾き飛ばされる。
必殺をかわされるのも、これで七度目だ。
しかも相手にはバテた様子すらない。

……こうなったら、
危険ではあるが、自らも強力な魔術を使うしかない。得意とする
『鳥』のイメージを持つ現象、それであれば、この剣戟の雨の
中であろうとも飛翔するはず。この距離だ、光の羽を持つ自らの鳥
が打ち負けるはずがない。

ひねるような動作でメルの中剣を巻き込み、外側へはじく。
後は左手を瞬きの間に胴に向け、

一言

と、そこで気づいた。

剣戟をはじめられたメル、
長髪で隠れたその顔の中、その口が……蠢いていることに。

………？

一刹那にも満たない僅かな間、ハーヴェイはその動きを見つめる。
小声、早口、感じる規則性。リズムは一定で、よどみがなく、そ
して背景に何かの力を感じるような気もする。

そう、それは。

魔術の詠唱に、とてつもなくよく似ていた。

「……《雷鳥》……」

全身を駆け抜けた戦慄、それを追い払うかのように、ハーヴェイ
は絶叫した。

……ありえない。

刹那が秒に感じられる高速の中、思う。

………こいつ、

自らの腕から雷の『鳥』が膨らんでいき、

……俺と戦いながら、

そしてメルに向かつて飛翔する。

……詠唱まで、してたのか？！

魔術の使用には、ただ言葉があればいいというものではない。魔術を行うためにはそこに力が存在しなければならず、その力は自らの内側に存在する力を『自らの意識の元』操って必要な形にしてやる必要がある。

言うなれば、手足を動かすようなものだ。

自分の中に存在する手を操って、必要な構えにして振るう。

それが魔術を使うということである。

当然、その行程を動きながら行うにはある程度の慣れがいる。一度感覚をつかんだり、連続で使用する際にはその『手』の動きを体が覚えていたため言葉だけで使えるが、長時間の詠唱を必要とする魔術などにおいては、相当の熟練にならなければ戦闘しつつ、詠唱を進めるなど不可能といってもいい。

それを、眼前の少年（少女？）は……

飛翔した『雷鳥』、ハーヴェイのもつとも慣れ親しんだ現象の魔術は、

メルの剣、その一振りの元に、いなされた。

その唇が、更なる言葉を繋ぐ。

「……偉大な王、仕えし雷魔、汝が力、我が一刀の振りの元に顕現せよ」

剣が再び振りかぶられる。そこから感じられるのは自らの『鳥』など足元にも及ばぬほどの甚大な力の固まりであり、方向性を持つ

にたる『意志』である。

紛れもない、それは間違いなく魔術、それも精霊域に位置するほどの規模の……

……戦闘中に……こんなレベルの……

戦慄する。

が、それも。

「小鍵魔術『フルフル雷魔の爪』」

瞬きのこと。

瞬きの後には振りかぶられた剣が振り抜かれ……

そして大音が広場を割った。

咄嗟に展開した盾の向こう、剣の一振りと共に炸裂した三本の雷爪は大地をなめ、えぐり、持ち上げ、弾き飛ばし、そしてその上に存在するモノを薙払う。

閃光はもはや光ではなく壁であり、

大音はもはや音ではなく衝撃である。

『爪』は一雑をわずか数秒の間に行うも、巻かれたモノにとっては生死をわける永遠。ただの運によって人が死に、ただの運によって人が生きる。そんな紛れもない、命のやり取りの瞬間たる永遠。

客観ではわずか五秒足らず、主観では永遠にも等しい時間が流れて……

そして唐突に『爪』は終わった。

えぐり取られた地面、黒く焼けた倉庫の壁。ハーヴェイのはる

か後方にあつたはずの砂山さえも『爪』から逃れることはできず、その山の内側と……一つの腕を覗かせていた。

そして、その山の脇。

そこに転がるのは、紛れもない。ハーヴェイに最後まで付いてきてくれた同志にして、信頼のおける仲間であるところの……二人の魔術師だった。

「……………！」

ハーヴェイとメル、二人を除き立つ者のいない広場を走り、思わず駆け寄った。

あれほどの雷撃である。自分は咄嗟に盾を展開できたから無事であったものの、二人は遠距離から援護詠唱を続けていたのである。その間に反応できたとしても、不完全な形で詠唱を放り出せるわけもなく、つまり二人にはあの雷撃は……………

最悪の可能性を排除すべく、ハーヴェイは手近にいた一人を抱き起こす。

……………熱い……

抱き上げたその体が、異様なまでに熱を持っている。その熱さはおよそ健康な人間にあり得る熱さではなく、病に侵された人間のそれ、詰まるところこの人間はもしかすると死……………

「……………」

その可能性を否定したのは、
小さな、呼吸だった。

………生き、てる……

身が莫大な安堵の中に落とし込まれる。一気に全身が弛緩し、緊張が一気にゆるみ、そして目線は周囲をさまよって……

砂山からはみ出し腕、それが動くのを見た。

「えっ………？」

………どういう、ことだ？

あれだけの量の砂塵が上に積み重なって、呼吸さえも封じられて、そして先ほどの雷撃。

それだけの攻撃を受けて、はたしてなんの対策もしていない人間が生存出来るだろうか？

………できる、わけがない。

そして、魔術師二人。

あの雷撃を無防備で直撃して、無傷。

そんなことが、偶然であり得るだろうか？

………ありえない。

目線が自然と、あの少年（少女？）の元へと向かった。

悠々とした様子で特に構えるでもなく、ただハーヴェイを目線にとらえている。

それだけ、だった。

………まさか………

思い至ったのは、一つの可能性。

……まさかこいつ、最初から殺す気なんてなかった？

「……お前……まさか……」

呻くように漏らした言葉に、

「ちよつと大変だったけどね」

内心を汲み取ったのか、少年、メルは笑みを交えてそう言った。

「なら、まさか残りの同志も……」

「うん。殺さないように言っただけだ」

……なんて奴……

内心で、ハーヴェイは嘆息する。

誰かを倒そうとする際、殺してしまうより殺さない方が遥かに難しいと言う。多人数になればそれを制圧する難易度も上昇し、それにもなつて非殺傷の難易度も……跳ね上がる。

それを、こいつらはいとも容易く行ったと言う。
いったい、

一体どれほどの実力の持ち主たちがこの依頼を受けたというの
だろうか……

「……………」

戦う理由も、戦うにたる戦力も。

そして私怨すら、なくなった。

かわりに芽生えたのは願望。希望にも似た、小さな灯火だった。

……こいつなら、

こいつならあるいは、俺のやろうとしたことを理解してくれる
かもしれない。

そんな、思いだった。

だからこそ、ハーヴェイは武器を納め、

一章 第四話 広場の戦い(2)

「くっ……」
「ぬうっ……」

正面からの機械の突撃に対し、メルは左に大きく転がった。

大型の横幅、強靱な表面、強力な突撃力。当たれば通常の人間では、まず無事ではすまされないだろう。

巨大な質量、その存在はそれ自体がほかならぬ大きな武器となる。突撃すれば質量は大きな威力をもたらす要素となり、敵側からの攻撃に対して質量は揺らぐことがない重要な足場となり、また部分的に破損させられた場合でもその断片が大きな質量を持っていれば、それはただの破片ではなく厄介な障害物や弾丸となる。

何の遜色もつけない質量、それはある意味もつとも単純で、もつとも厄介な武器だ。

それに加え、機械は生物ではない。

生物ではありえない強靱な表面、凶悪な装備の数々、さらに生物に同一の重量を課せば動けなくなるような質量を軽々と操る動力まで持っている。

そんな存在を相手にすれば、騎士団クラスの実力を持つものでもろうとも苦戦は必死であろう。

そしてそれは、

「……………くっ」

騎士団クラスと歌われた実力を持つ、メルでさえも例外ではない。機械の有する八本の足、それらの付け根に存在する砲塔から発射される弾丸をよけるべく、再び回転拳動を続ける。

足元の地面に穴が穿たれ、土が跳ね上がり、衝撃がメルへと伝わる。着弾時の大音はそのまま衝撃として地面を伝わり、結果地面を

転がるメル動きを阻害する。

そして回転拳動を続けるメルの前に、土の斜面が目に入り、

「……………！」

咄嗟にメルは横に飛びずさった。

上がった視線の先、そこに存在するはメルの形作った土の山。

その上に上ろうものなら、格好の的になる。

……………この…っ

身をひねって弾丸をかわし、その拳動の中で中剣を振りかぶり、

「……………《飛べ》！！」

自分めがけて連射される砲塔に向かって、飛刃を放った。

弾丸を切断しながら飛刃は飛び、砲塔に着弾、一門を破壊する。

が、全力で横一線を放ったことで体勢が崩れ、もう一門の狙いがメルを確実に捕らえ

「《雷鳥》！」

る、その寸前。

機械の背後、飛来した『形成す雷』が、メルを狙うもう一門を穿った。が、その直前に放たれた弾丸は正確に姿勢を崩しかけたメルに向かっており、その弾丸は確実にメルに命中……………

「《防^{リフレクト}御障壁！》」

咄嗟に展開された青透の壁によって、弾丸は阻まれ、ただの金属の塊と化した。

そのままメルの姿勢は崩れ、左側に体が倒れる。その瞬間を狙い、金属音と共に機械が跳躍、倉庫を軽く飛び越えるほどの高度を持ってメルの上に迫る。

………避け、

咄嗟に転がって安全地帯と思われる場所に遷移する。
が、

………きれない！

機械の足、八本存在するそれらが、完璧に折り曲げられていた。折り曲げられたそれらは、もはや蜘蛛の足のごとき『関節のある棒』ではなく、『金属の平面』だ。避けきれぬ隙間は、存在しない。

………間に合うか……！？

思いながらも己の内側に意識を向け、意味を圧縮、強力な『雷』をイメージし、上に向かって放、

「あやたか『彩鷹』……！！」

その寸前、横合いから飛来した『紅の大鷹』によって機械が横合いにすっ飛んだ。

判断は一瞬。内側に再び意識を向け、行き先をなくした魔力を身体活性に移行、一気に身を起こし、空中で姿勢を崩した機械めがけて跳躍、そして中剣を大きく振りかぶり、

「………寝てる！」

言葉と同時に、機械の脚部を中剣で全力を持って殴り飛ばし、倉庫の壁へたたきつけた。

濛々と広場に満ちる粉塵、飛び散った瓦礫。

それらの満ちる中、メルは舞い降りるようにゆっくりと広場に着地する。

「大丈夫か……！」

着地と同時に、駆け寄ってくるのはハーヴェイ。粉塵にまみれたのか、その姿は初見のときよりも遙かにみすばらしく、声がなければ同一人物だと認識できないほどだ。

「大丈夫。だけど……」

隣のハーヴェイに答えつつ、メルは言う。

「あれ、君の仲間じゃ、ないの？」

その言葉に、ハーヴェイは憎々しげに機械をにらみつける。

「……違う。俺たちのやろうとしたのは単純な破壊だけ。人に手を出すつもりなんてなかった。動かなかつたのも、依頼主の都合だつたんだよ」

「依頼主……？ ってことは、君たちは単純な依頼で？」

ああ、とうなずくハーヴェイ。

「……大金が、要るんだ。家族のために。だから、仕事なんて選べなかつた」

「……医者？ それとも、家？」

「……前者だ」

「じゃあ、用意するから手伝え、って言ったら、どうする？」

急速で、ハーヴェイの視線がメルを捕らえた。

「……大金を、用意してくれるのか？」

「いや、用意するのはお金じゃない。医者だよ。知り合いにね、慈善家業みたいな値段で医者やってる人がいるんだ。紹介でもないと見てくれないだろうけど、僕がいれば、大丈夫」

「……頼む」

「……了解」

中剣を再び握り締め、メルはうなずいた。

「じゃあ、あいつ沈めるの、手伝って」

「沈めるって、終わってないのか？」

「ああ。あの程度の衝撃じゃあ、まともなダメージにはなっていないよ。潰した砲塔は結構効いたほうだと思っけど、それでも装備一個分だ。まだ、あいつは壊れてない」

機械国家、ヴィライノ国。その国家の最大の特徴は、魔術の恩恵を完全に排除し、物質的な豊かさ・能力に頼りきっている点である。現象 の代わりに機械を用い、創造 の代わりに機械を用い、召喚 の代わりに己の技術を用いる、それは本来『精神』によってなるはずの『魔術的な豊かさ』の代用品として、『肉体』によってなる『肉体的な豊かさ』を求めた結果。

が、それ故に。

その国家の被造物は、侮れない。

眼前の機械、ヴィライノ国製工作機械 L724、通称『アクロバット』もそうだ。

岩盤掘削用の、蜘蛛形機械。上からの衝撃は落盤に対抗するために取り付けられた装甲によってほぼ完璧に阻まれ、脚部の関節は数が多いものの、それら全てに動作不良防止用の鋼板が取り付けられているため弱点にはならず、また下側に関しても急激に噴出す熱湯や水による行動不能を防ぐため、密閉は完璧に行なわれている。攻撃面に関しても、岩盤を穿ち削るための砲塔に加え、砲塔では破壊できぬ壁を破壊するための強力な牙、もともと機体が有する重量、高速起動を可能とした動力など、相手にするには厄介なものばかりがそろっている。

だが、そんな機体にも当然ながら弱点が存在する。

それが、

「ハーウェイ、」

「何だ、メル」

「僕のガーゴイル潰した短剣の魔術、アレ、現象 に出る？」

内側からの、撃破である。

怪訝な表情をしながらもハーヴェイは、

「あ、ああ……………」

「だったら、投擲でも直接でも何でもいい。あいつの胴体の中央に、雷の現象 仕込んで短剣突き立てて。そこから先は、僕がやる」
言いながらも腰をかがめ、突撃の用意をする。それと同時に確認するのは自らの内側、この先の先頭に、自分の体が耐えられるか否か、だ。

…………… 精霊域、一発分。活動も含めると、それがギリギリか。

長引かせる事はできない。長引かせればその分、自分の内側に存在する爆弾は徐々にメルの中で導火線を縮め、やがて爆発する。そうなれば、身動きが出来なくなるところか命に関わるだろう。ゆえに、使用する魔術は

…………… 一撃で沈められる奴で、威力も高め、貫通力のある…………… 『角』

そのレベルでなければ、一撃では沈まないだろう。

…………… 準備は、

いい。内側で魔力を操作し、当面動くのに十分なほどの身体能力効果を行なう。

そして、

「…………… 来るぞ！」

ハーヴェイが隣で一括する。

瞬間、粉塵の中でなにやら巨大なものが身じろきし、

つつつつつつ

金属の響きを持って、再び巨大な金属塊が二人めがけて突撃する。速度は速い。学院でもまだ実践に不慣れなものは、恐らくはよけきれないだろう。

が、それが歴戦のつわものであり、ましてや来ることが事前に予測できていれば、

「右！」

「おう！」

よけることも、掛け声でタイミングを指示することも、難しくはない。

メルは掛け声に合わせたタイミングでハーヴェイは横に飛び、メル自身は小柄な体軀を生かし、地面に深く沈みこんで回避した。そしてしゃがんだ姿勢そのまま中剣を大きく振りかぶり、

「《飛べ》！」

一声と共に、飛刃を放った。

飛刃は狙い変わらず機械の足の付け根、ほかと比べて装甲がわずかながら薄いはずのその場所に命中する。が、もとの硬さの違いだろうか、大きな傷をつけるどころか小さなすり傷一つつけられず、ただメルが隙を晒す結果に終わった。

そして、機械はその隙を逃さない。

地面をスライドしたまま、その勢いで方向転換。メルの方角に向き直り、再びメルの方へと突撃する。姿勢を完全に崩した今、メルにこの攻撃を回避する事はできない。

「ぐっ……がっ……！」

突撃の勢いのまま、機械の足の一本がメルの腹部に直撃する。肋骨がきしみ肺の中から空気が完全に抜け出、衝撃が脳まで駆け抜けた後方へと思いい切り飛ぶ。

痛みというよりは衝撃そのものの攻撃を受け、後方へ飛翔したメルを、

放置しておく理由は、ない。
そのまま機械は全力跳躍し、空中で身動きの出来ないメルを狙って飛び上がる。

……………くっ

内心で毒づきながらも、メルは内側で強引に魔力を操作、身体能力強化を神経系統にだけ集中させ、余剰分を打撃を受けた部分の鎮痛に回し、こちらに向かつてタツクルを敢行した機械の足を……………
「…っ、このっ……………」

蹴飛ばして、上向きに跳躍した。

タツクルを空振り、勢い余って壁へと激突しようとしている機械を足元に、メルは空中で中剣を引き込み、切先を壁に激突する寸前の機械にむけ、

「《穿て》！」

言葉と共に、神速の突きを放った。

飛刃と同様、飛来するのは刃を一点に集約した『飛来する弾丸』。その弾丸は狙い変わらず、壁に今まさに激突している機械の足の付け根に命中する。

弾丸の勢いに後押しされてか、機械の身動きが取れなくなる。

その隙を見逃す理由は、ない。

「ハーヴェイ！」

「了解だ！」

空中で魔力を身体強化に使い、着地しながらメル。その間にもハーヴェイは壁から零れ落ちるように落下を始めた機械に狙いを定め、何かしら魔力を内側で練り、

「《川蝉》^{かわせみ}！」

ハーヴェイが弾丸のごとき勢いで己の短剣を打ち出した。

打ち出されしはまさに水上から魚を得んとする川蝉の嘴。狙った獲物を逃すことなく穿ち穿ちて命を奪う、死の刃そのもの。

打ち出された短剣は姿勢を崩した機械の胴体の中心に向かい、そしてそのままその金属の甲殻に刺さる、はずだった。

機械の中に、防御障壁を展開する機能が付随していなければ。展開されたメルのものと同じ色、同じ強度を持った防御障壁。機械の胴を狙った短剣は遭えなくその障壁に突き刺さった。

「何っ?!」

困惑するハーヴェイをよそに着地した機械は障壁を引っ込め、蜘蛛で言うところの牙、その左右に存在する外装を『展開』した。

展開された外装、その下から顔を出したのは、無数のパイプを同一方向円形に並べたような外観をした金属体。

……ガトリング砲!

思った瞬間、砲塔が回転し、無数の弾丸が打ち出された。

金属板をも軽く抉り穿ち貫く無数の弾丸、それらをよけるべく、再びメルはハーヴェイと反対方向に飛びずさった。

それを追尾するかのごとく、砲塔がメルとハーヴェイ、それぞれを追って回転する。

……厄介にも、ほどがある!

外装は厚く、表面への攻撃は通じない。

重量は重く、一撃一撃が重い。

武装は多く、その一撃は命を奪いかねない。

防御は硬く、こちらの攻撃のほとんどが

……通じない。

手段はわずかに一つ。内装への攻撃だけ。だが、先程も行なった小鍵魔術では内側まで貫通する事は期待できないし、何より広範囲

に飛び散りすぎて狙った場所を確実に破壊できない。

……… やっぱり、『角』。それも、ターゲットになるようなものを突き立てないと………

だが、ハーヴェイの短剣では軽すぎる。メルの手っている中剣はハーヴェイの短剣より長さはあるが重量はさほど変わらないため、威力にも大きな違いはなく、何よりとどめの一撃を叩き込む必要性があるため、媒介として有力な力を持つこの剣を手放すことは出来ない。

この状況を打破するために理想的な武器、それは、

……… ダルンの、極長剣。

あれならば重量、長さ、抗魔力、全てを加味しても十分な要素をかねそなえている。

小鍵魔術を放つてから、すでに数分。

あの雷撃が見えていたなら、間違いなくあの二人は来るはずだ。

「《飛べ》！」

回避のための跳躍後の着地、その瞬間に新たに出現した砲塔へ飛刃を放つ。が、機械も学習したのだろう。姿勢を軽く沈め、そのまま横に強引に平行移動することで、飛刃を軽々と避けられた。

……… 粘るなら、

機械を破壊する必要はない。

重要なのは時間を稼ぐこと。

そしてそのためならば、武器の一つでさえも破壊する必要性はない。

機械の砲塔がそれた隙を突き、一気に機械の懐に走りこむ。

機械の速度がいくら高速だといっても、その速度には限度がある。ましてやそらされた直後であれば、逸らされたことによって生じた

力に抗って戻す必要がある。

つまり、

……砲塔の稼動が、一瞬遅れる……！

遅れた。

小柄な体躯を再び生かし、メルは二つの砲塔の間、蜘蛛で言うところの牙の正面に移動、中剣を振りかぶり、

「《切り裂け》！」

言葉と同時に、中剣を横一線にし、二つの砲塔を両断した。

手の中に帰ってくる金属同士がこすれあう不気味な感触と、筋肉繊維を切断したのによく似た手ごたえ。それらの中で二門存在したガトリング砲は両断され、機械は再び武装を失う。

が、メルの現在の位置。

そこは、機械にとって見ればもっとも強力な打撃を叩き込める部位。
牙の、正面である。

「ぐぐっ……！」

斬撃の後の隙、そこを狙われ、機械の牙による突撃を受ける。寸前で体をひねり、牙による攻撃を受ける事はなかったものの、至近距離から機械による突撃を受け、行動が取れなくなる。

……覚悟はしてたとはいえ、

そのまま機械ならではの無拍子挙動でメルの正面まで機械が移動し、

……この状況は、

そのまま右の前肢、そのまま振りかぶればメルを左側に吹き飛ばせる武器を引き、

……まずい。

そしてその前肢が振り下ろされた。

瞬間、

「させるかよ！」

飛来したのは一本の短剣。

先程障壁に阻まれて届かなかった、ハーヴェイの《川蝉》だった。獲物を穿ち穿つ力を持った《川蝉》はメルを打ち据えんと振り上げられた蜘蛛の足の付け根を穿ち、そしてその足を根元から破壊する。

「くっ」

それを視認した瞬間、メルは空中で強引に体をひねって中剣を地に突き刺し、無理やり体の勢いを停止、それを軸にすることで体をひねって着地し中剣を引き抜いて飛来する『機械の前肢であったもの』に狙いを定め、

「《穿て》！」

前肢ごと、機械の本体めがけて突きを放った。

強力な武器であればあるほど、確かに実戦闘においては有力である。

が、強力であればあるほど、

それを利用された際のダメージは、深刻なものになる。

中央を穿たれたことによって前肢はそのまま『金属の弾丸』と化し、機械の胴体中央部、牙のやあ上の辺りに命中する。

が、

「……………あれでも、駄目か！」

ハーヴェイの言葉通り、機械は姿勢を崩したもののそれ以上の変化はない。さすがに掘削用の機会といったところだろうか。あの程度の衝撃では、崩れ落ちもしない。

……………くっ。

内心で、メルは毒づく。

機械の丈夫さに、ではない。

自らのタイムリミットの少なさに、である。

メルの内存在する魔力、それが、付きかけていた。

魔力というのは燃料とよく似ている。激しい稼動をすれば同じ身体能力強化においても大きく消費し、また強引な強化変更を行えばそこでもまた大きく消費することになる。軽度の魔法を使用すれば当然その分も大きく消費し、結果的に活動できる限界時間は大きく削減される。

……『角』の分も考えて、あと飛刃四枚……穿で……三つ。強化だと、あと三十秒……

もはや、余裕はない。

そう思った、瞬間だった。

「《飛べ》！」

「《吹き飛べ》！」

響いたのは、メルでもハーヴェイでもない男の声。

飛来したのはメルのものより遙かに長く、そしてまた切れ味も鋭い飛刃と、長さを比較するのが馬鹿らしくなるほどの極長剣。

極長剣、飛刃。その二つは狙いたがえず機械の胴の端を直撃し、その巨体を半分に浮かせ、

「剣弦魔法《九字訪印剣》」

言葉と同時に、一閃と共に放たれた網目状の九本の斬撃により、その巨体を横に回転させながら吹き飛ばされた。

瞬きの間に起こったそれらの現象の中、メルは見る。眼前に舞い上がった粉塵、その中で刀の特徴的なシルエットを構える細身の体軀、宙から今まさに着地しようとしている人間の姿と、そしてその人物の手へと今まさに帰ろうとしている極長剣

「ハーヴェイ！」

「了解だ！」

メル的一声の意図を一瞬で理解し、ハーヴェイが宙を飛来する極長剣めがけて疾走、受け取るうとしていた人物を押しつけて柄をホルドし、そのまま大きく跳躍、吹き飛ばされたことよって完全にバランスを崩している機械の正中線めがけて狙いを定め、

「ようしかわせみ《驚嘴川蝉》！！！」

言葉と同時に、極長剣を投擲した。

飛来したのは先程とさほど変わらぬものと化した極長剣。その先端はまさに獲物を捕らえようとする川蝉の嘴そのものでありながらも、その先端は魚ではなく地を駆ける獣を穿ち穿つための鷲の嘴。その嘴は獲物と自らを隔てる『空間』という障害を容赦なく穿ち穿ちながら接近し、

そして獲物を守らんと広がった青の障壁さえも打ち抜いて、機械の胴体の中心へ、旗竿のごとく深々とその身を屹立させた。

「ガラム、足止め！」

「承知！！ 《切り裂け》！」

言葉と同時に粉塵の中を走り抜け、横合いを先程よりも鋭利な飛刃が通過するのを感じながら跳躍する。身のうちで今までイメージし続けてきた形に魔力を操作、身体能力強化を打ち止め、全てをこの一撃のために用いる。

「《偉大なる王、使いし雷魔、その体は城砦粉碎する破城の一撃にして天騒がす天神の憤怒なり。その力はあらゆる生命奪い去る狂気にして万象の害悪となる危機である。汝に命ずる、その力が一端、汝が契りの祝詞ならべし者の名において顕現せよ》」

集うは雷。破壊以外の方向性を一切持たぬ破滅の光にして機械を動かす動力源。その力はメルが手にする中剣に集い、その刃を金属

ではなく光そのものの色へと変えていく。

その剣を、機械の上空で振り上げ、

「小鍵魔術《雷魔の角》」

言葉と同時に、振り下ろした。

瞬間、剣より駆け抜けたのは一寸の雷。城砦でさえも打ち砕く破城の一撃にして天より振りそそぐ神の鉄槌。破滅の光はメル振り下ろした剣から剣へと走り抜け、剣を駆け抜けた雷は瞬きの間に置いて機械の内側を破壊し、蹂躪し、冒瀆し、暴虐の限りを尽くす。

『外側から何かが入ってこない』という事は、裏を返せば、『内側から何かが出て行かない』ということでもある。

内側に叩き込まれた破滅によって、機械はまるで断末魔の悲鳴を上げるかのごとく身もだえし……

そして内側からゆっくりと煙を上げながら、崩れ落ちた。

#

「あゝ疲れた……」

着地し機械の完全な機能停止を確認した瞬間、中剣を鞘に収めもせずにメルは地面に両足を投げ出した。

全身に満ちる凶悪なまでの疲労感と、内側から腐っていくような異物感。間違いなく魔力の使いすぎと動きすぎが原因だろう。もとメルはそれほど体力のあるほうではない。

「すまん、メル。だいぶ、遅れた」

申し訳なさそうに頭を軽く傾けながら刀を鞘に納め、ガラム。

「本来ならもう少し早く終わらせる予定だったんだが、如何せん数が多すぎた」

「いいよ、別に……こっちもまさかガーゴイル半分やられるなんて

思ってなかったし」

「確かに、予想外の事態ではあったな。まあ、ちゃんと半分到着してくれたから今までで済んだんだが……しかし、」

ちらりと、

ガラムの眼が、所在さなそうに立っているハーヴェイを捕らえた。

「この人物は、今現在は味方で、いいのか？」

警戒するように、その手が腰の刀へと伸びる。

「大丈夫なんじゃねえのっ………」と

その問いかけに答えたのはハーヴェイでもガラムでもなく、機械から自分の極長剣を引き抜いたダルンだった。

「俺らの敵だったら、こいつの援護が来た時に一緒に敵に回ってるはずだろ？ あっという間に片付いたからわからなかったけど、メルと共闘してたみたいだったぜ？」

極長剣を背の鞘に戻し、

「だったら、味方でいいんじゃないの？」

ダルンの軽薄ながらも芯を得た言葉に、不機嫌そうにハーヴェイは顔をゆがめる。

「……別に、お前らが襲い掛かってこなきゃ俺が味方とか敵とか、そんなことは関係ねえ。違うか？」

「違うないな」

鞘から手を放し、ガラム。

「……それよりも、メル……とかいったか？」

表情の中に、一抹の不安を滲ませながらハーヴェイがメルの隣まで移動する。

「さっきの話、本当だろうな？」

「さっきの……ああ、医者の手配の話ね。大丈夫。僕ももうすぐその人のところ行くから、その時に付いてきてくれれば紹介するよ。そ

れに……今いろいろとまずいから」

メルの内側、内臓の辺りにじわじわと広がっていく痛み。間違いようがない。この症状は今の今までメルの内側を蝕んできた持病の傷みだ。

「メル……」

ガラムがそれを察したのか、心配そうな顔を向けてくる。

「で、ハーヴェイ、」

「ん？」

安心したのか、先程の戦闘までの表情よりもかなり穏やかになった、『好青年』という表現が明確に当てはまる顔が振り向く。

「この人たち、どうする……？ あと、あの機械も……」

「……ん？ ああ、放置しといてくれてかまわない。どうせ俺も連中も雇われなんだ。機械にしたところで、ばれたくない奴が勝手に隠匿するよ」

「放置……って……君の仲間じゃ……？」

「ああ、確かに仲間だけど、今は違う。雇われてる理由もないし

働く前に、潰されちまったからな」

参ったよ、と苦笑顔だった。

………かわってる。

素直に、メルは内側で実感した。

仲間とそうでないものの区別を明確に行う性格なのだろうか、先程までのメルたちへの態度の変貌といい、ゴロツキたちに向ける眼の変わりよつといい、その変貌はむしろすがすがしいレベルだ。

………仲良く、できるかも……

内心でそう思いながら、この場を立ちふさがるべくメルは立ち上がり、

ぐらりと。

その瞬間に、世界が揺れた。

湾曲する視界、感触を失う肉体。

肉体を覆うのはどうしようもない倦怠感と虚脱感、そしてこみ上げてくる痛みのみとなり、それ以外の己の体の感覚が喪失する。自分の体の中が傷んでいく感触はそのままメルに痛みとなってこみ上げ、そしてその感触そのままに自己の内側から液体がこみ上げてくる。あまりの全身を蝕む症状の大きさに立っていることすらできなくなり、地面に四つんばいになって……

「…… がふっ……！ がっ……」

獣のような奇声と共に、口から零れ落ちたのは真紅の色。人の命を示す、真っ赤な真っ赤な鉄錆びの赤。

周囲の音は、もはや聞こえない。

周囲の風景は、もはや紅以外見えない。

その遮断された世界のなか、メルの意識は暗闇の中にゆっくりと落ち込んでいき……

『大丈夫よね？　メルは、男の子なんだから』

やさしげな、母がいればこんな声をかけてもらえたであろう声を聞いて、

意識は、闇の中に落ち込んだ。

暖かいと、わかる。

だけどそこには何人いるのかも、

そこに果たして自分の姿があるのかもわからない。

だけど、確かに空っぽであるはずの自分の中にはこの風景があつて、

そして時折、夢の形でこの風景を見る。

離れたくないと、ずっとこの中にいたいと思ってしまう、この夢の中で。

だからこそこの夢を見た後はいつも以上に起きるのが嫌になり、目覚めることを拒みなくなり、生れ落ちることを拒絶したくなる。

しかし、眠りというものは非情なもの。

極上の清水にその身を浸した後に、

その清水を、全て拭い去ってしまう。

拭い去られぬようにしようとも、眠りから覚まそうとする力の前においてはわずかな湿り気を残すまでにしかならず、そしてその湿り気が残っているからこそ、それが拭い去られてしまったという思いが色濃く残り、眠りからの覚醒をよりわびしいものへと変えてしまふのだ。

……… だったら、いつそのこと夢の中のことなんて全部忘れてればいいのに。

そんな風な思いを抱いて、

眼を、覚ます。

「ん……………」

温かなものに包まれている感触の中へ、意識が浮上する。

その瞬間に意識を蝕むのは五臓六腑が鉛へとその構成要素を転じさせたかのような、腹部に感じるどうしようもない違和感。痛みと気だるさが交じり合ったようなそれはいつもメルから何かをしようという気力を奪い……………そしてそれ故に動く気がまったく起きなくなる。

……………発作、か…

内心でつぶやき、首から上だけをつかってメルはあたりを見回した。

白色のレンガが敷き詰められた床、淡い色の花が描かれた壁紙。天井は白というよりはやや明るみを押さえた乳白色で、今自分が横たわっているベッド以外はベッド脇の小机と小さな本棚、それと何脚が存在する木製の椅子程度しか存在しない。

白で、簡素で、暖かい。

この部屋の役割を考えれば、保有する要素はそれで十分だ。

「……………」

気だるい体を無理やり動かし、ベッド脇の小机の上に置かれている卓上ベルを抜ける力に任せて叩く。

音は、出ない。が、代わりに響いたのは感覚を磨いた自分でも感じることが難しいほど微細な魔力の波。波は壁を通り抜けてどこかへと広がっていき、そしてどこか遠いところで軽い金属の響きを上げる。

そのまま、しばし。

- とてとてとてとて

どがっ！

「うううううう……………」

とてとてとてとて

がちやつ……………

「お目覚めですか……………?」

メルのすぐ右、そこに存在する檜材の重厚なドアから顔を出すのは一人の少女。メルと同じように微妙に色合いが違う瑠璃色の髪に、白磁の肌。顔立ちはやさしさとは無縁のガラスのような静謐さを湛えた美しさを持ち、当然ながらその表情も彩りが無い。眼はやかにこつた青と緑の二色で、^{ヘテロクロミア}服装は白のワンピースだった。

セイル・ミルデスタ。

それがその少女の名前である。

メルが現在寝そべる病室のような部屋、それを保有するメルの子主であるところの人物が保有する屋敷を管理させるために雇っている侍女、らしい。

らしい、というのは……………

「……………セイル、またぶつけた……………」

「……………どうしてそれを……………」

部屋に入ってドアを閉め、メルに一礼しようとしていたその動作が止まる。

「……………いや……………声……………聞こえてたし……………」

「……………迂闊でした……………」

つぶやき、メルに一礼する。その表情は変わらないが、どうしてもメルにはその一礼の動作が赤面した己の顔を隠そうとしているように見えてしまう。

そのまましばらく、セイルは頭を下げたまま動かさず、

「……………失礼しました……………」

言いながらメルベッドに接近し、

ゴガッ!

接近しすぎてメルベッドに脚を強打し、

「あ……………」

痛みのあまりか、一步下がった拍子に転倒し、

「……………あぐっ……………」

思い切り尻餅をついて、

「……………」

起き上がったってワンピースの埃を払い、

「……………失礼しました」

一礼すると同時にベッドのふちに額を強打した。

「……………大丈夫？」

「……………」

もう言葉もないらしい。

そう、このセイル・ミルDESTAという少女、表情が少なく言葉数がないに等しく社交辞令以外で人と関わろうとしないのだが、その実見ての通りかなりドジというか、よくいろいろな場所に体をぶつけるのだ。

おかげで親しみやすくしてしょうがない。

そう、メル of 拾い主でありセイルの雇い主である人物は評していた。

「……………お薬です……………」

ふらりと顔を上げ、無表情（ただし額がちよつと赤い）のまま、腰のあたりについている薬瓶をメルに手渡す。

「調査はいつもどおり、正し量は少し大目ですので夜当たりに軽度の風に似た症状が出るかもしれません。よろしいですか？」

「ん、了解。基本いつもどおりだね」

「……………そうですね」

言いながらもこれ以上恥を晒すまいという意思の表れか、足早にドアに向かいドアのところまで今度はどこにもどこもぶつけない一礼、そしてドアを開けて部屋の外へ……………

「あ、失礼」

出る直前、再び部屋の中へ眼をやった。

「どうかした？」

言いながら気だるい体を無理やり起こして手渡された瓶からコルクを抜く。漂ってくる香りは複数種類のハーブを混ぜて火で炊いたような、清涼感があり心地よいのだがどこかむせる雰囲気を持つ特殊なもの。

「メルウッド氏から伝言です。『君に会いたがってるみたいだから、会ってあげてくれないかい？』、だそうです」

「……………誰に？」

「……………それは、ご自分の目で。もうその方は廊下でお待ちなので、お会いしたくない場合はお帰り願いますが……………」

「いや、いいよ。多分薬で一発だから」

言いながら薬瓶を傾け、中身を一気に飲む。

口の中に広がるのは強烈な酸味と苦味と甘み。それらの混濁した奇妙な味の中に弾けるような刺激が存在し、また冷たいはずなのに触れた感触は暖かいという形容しがたい奇妙な感触を伴った物体が一気に喉を滑り落ち、胃の中に下落して

そして一気に全身に存在していた倦怠感と痛みがわずか残して全て消えうせた。

ことり、と。瓶をベッド脇の小机の上に置き、セイルと向き直る。

「呼んでいいよ。もう大丈夫だし」

「……………了解しました」

セイルはそのまま部屋を出て行った。恐らくは、部屋の外の廊下で待っているという人物の元へいったのだろう。

待つこと、数秒。

こんこん

部屋の戸が、控えめな拍子でノックされた。

「どうぞ」

メルの声にこたえて、ゆっくりとドアが開く。

「失礼しますです……」

「邪魔するぞ」

入ってきたのは、予想を裏切る意外な組み合わせだった。

後者の声は、発作を起こして倒れる直前、機械と共闘する直前、メルの仕事を阻害する敵として敵対した人物である『鳥』を軸にした魔術が多いと思われる、かなりのレベルの短剣戦闘術の使い手であるところの青年、

ハーヴェイ・カーラーだった。

今は何の仕事をしているのか、どこで入手したのかもわからない絹糸のような良質の布で織られた木目色の上着を着用しており、全体的な雰囲気も少し落ち着いたように見える。

が、そのハーヴェイが伴っている小さな少女。

ともすれば少女とも呼べてしまうそうなほど小さな、茶髪ツインテールの少女には見覚えがない。

「あの、間違えてたら、すいません。つい一週間ほど前、このハーヴェイ・カーラーという人物に勝利して機械とそのまま戦って病気の発作で倒れちゃった、メルさん………ですか？」

舌足らず、と呼ぶには少し長い舌運びで、どこかびくびくした様子の子のまま少女は言った。

「……………ああ、そうだけ……………」

言った瞬間、ピクリ、と少女は体を震わせ、そのまま体を二つ折りにせんばかりに頭を下げた。

「ああ、やっぱりそうでしたか！　うちの兄が『あんなちゃんまい女の子に負けかけたのは初めてだ』なんていうほどでしたから、間違いはないと思っただんですけど中性的なお方と聞いていたもので、こんなにかわいらしい見た目をしておられるとは思いませんでした。でも本当に、ありがとうございます！」

いきなり早口、かつ大声でまくし立てる幼女。思わずメルはたじろぎ、

「ちょ、待って。ありがとうございますって、どういうこと？　それにうちの兄って……………」

「あ、すみませんです。ちょっと興奮しちゃいました……………」

「ああ、ちよつと落ち着けナーシャ。一応病人なんだから」

言いながらハーヴェイが幼女を伴い、椅子をベッド脇まで移動、ほら、と幼女を座らせ、自らもその隣の椅子へ座る。

「……………ありがとう、ハーヴェイ」

「どういたしまして」

どことなくしおらしい様子で、ハーヴェイ。

「それで……………この子、誰？」

「ああ…紹介する」

かしこまった風に、ハーヴェイが膝の上で指を組む。

「まず言わせてくれ。ありがとう、医者、紹介してくれて。ホントにいい医者だったよ。おかげで寝たきりで歩いたりも出来なかった妹が、この通りだ」

「いや、たいした事は……………って、妹？　それじゃこの子が……………」

はい！　と幼女が元気よく。

「申し送れて申し訳ありませんです！　ナーシャ、ハーヴェイ・カーラーの妹、ナターシャ・カーラーです！」

元気よくその幼女、ナターシャは言い、

「お医者様のご紹介、本当にありがとうございますです、メルさん

！」

ぺこり、とメルに頭を下げた。

「いや、ハーヴェイにも言ったけど、たいしたことしてないよ」

「いえいえ、メルさんにとって見ればたいしたことじゃないかも知れませんが、ナーシャにとって見れば大きなことですよ。つい一週間前まで、ホントにナーシャ、歩けなかつたんですから」

「でも、こんなに簡単に治つたんだから……」

「いや、メルウッドの話だと、処置の仕方によっては死ぬこともあったそうぞ。しかも並大抵の治療じゃ完治は絶望的だったらしい」

「と、言うわけです。今こそナーシャ、こんなに元気に歩き回ってますけど、死にかけてたんですよ、本当に」

だからちゃんとお礼ぐらい受け取ってください、とナーシャは言う。

人並み以上に老成しているのだろうか、かなりしっかりした性格をしているらしい。

「でも、メルウッドさんっていい人ですよ。あれだけ難しい治療法だったのに、御代も破格でしたし」

ほっとしたような表情でナーシャ。

「まっただ。安いとはきいてたけど、こんなでいいのか、メル？」

対してハーヴェイは少し不安そうだった。

その様子を見、メルは内心で納得の吐息をつく。にやりと笑みを浮かべ、

「んー、なに要求されたかによるけど、いって言うてくれたんだからそれでいいんじゃない？」

「でもそれにしたって、あの難易度の治療法でこの程度ってのは……逆に不安だ」

「そうですね、メルさん。H波振動数共振式の魔道流体調整法って、王宮の医師たちでも出来る人少ない治療法なんですよ？ それをナ

「シャのためなんかにやってくれたのに、その御代が『お手伝い一週間 住み込み三食+二度のお茶つき』なんて、安すぎます」

「いいのいいの。実際おじさん、慈善家業でやってるみたいなものだし。それにナターシャ、H波振動数共振式魔道流体調整法って言うってたけど、H波って結構簡単に共振してくれるし、既知の部分が多いからそんなに機材も使わなかったでしょ？」

「あ、そういえばそうですね。D波観測にちよこつと薬品とか使った程度で、後は共振子だけでした。でもでも、流体調整を自家魔力で行わせるような発信子ってそれほど多くはありませんよね？ どれも高価だったはずですし……………」

「いや、流体調整って言っても魔力のほうからじゃなくて弦振動数からやったらそんなに専門的な機材はいらないよ。それに手間はかかるけど消耗品も使わずに済むし」

「あれ？ でも弦振動数って固有の生体波長にかみ合ってますから、弄るのにとんでもなく大変な労力かかるんじゃないやありません？」

「確かに弦振動数だけを弄ったら生体波長まで影響受けて下手したら魔響状態になるけど、一端生体波長の方にM粒子噛ませれば生体波長の振動数キープできるよ」

「でもでも、そうなることやっぱいお値段の方がおかしくなりません？ M粒子ってとてつもなく分離が面倒なんじゃ……………」

「M粒子だけ純粹ならね。生体波長にかませて影響かけるぐらいなら、別に極性転換した魔力だけでも事は足りるよ」

「ああ、なるほどです。確かに極性転換すればN因子が大量放出されますから、その時にM粒子も結構出ますよねー」

「うん。そういうこと。でき、ハーヴェイ」

「ん？」

今まで蚊帳の外状態で二人の会話を聞き流していたハーヴェイが、顔を上げる。

「ナターシャって、何者？ 普通に魔道量子学の専門部分の話につ

いてきてるけど、こっつて 創造 のミドル程度じゃついていけないよね？」

「ああ、そのことか」

どことなく誇らしげに、しかしどこかあきれたようにハーヴェイが笑みを浮べる。

「王宮学院 創造 研究部門、助教授。若干十二歳の若さながらその才能は目を見張るものがあり、研究過程に入りわずか半年の間に新種の霊薬の開発にも成功。国王からも期待をかけられ、王室お抱え研究者第一候補となるも病気を理由に故郷に戻り、現在療養中」
ため息混じりに何かの書類の丸暗記のような言葉を並べ、

「……一応、ナーシャについて残ってる記録で一番信用できるデータだ」

「ちよっ、それってつまりナターシャ……」

「ああ、ミドルも何も、もうとつくに飛び級で卒業して王宮学院の研究部門でとんでもないことやってる、正真正銘の天才だよ」

どの国においても、天才という者は存在している。

その存在は国力を挙げてその存在と研究成果を保護、利用し、いざとなればその頭脳と価値を遺憾なく発揮させ、国のパーツの一部として機能させることでさえ厭わない。そんな、《個人でありながらも国の一部としても機能できる、才能の塊》。当然その才能の発見には学のある場所、特に学園都市などでは血眼になってその才能を発掘しようとする。

ちなみにメルとガラムもその『発掘された才能』の一つとして力ウントされており、将来的にはこのまま何も成果を残さず卒業したとしても、王宮関連の研究施設や騎士団などに相当いい待遇で迎えられることになっている。

確かに、自分たちよりも上の才能を持つものが存在していることは予測していた。才能というモノが偶発的に出現するものである以上、それは当然なのだが

「ハヴ兄……そういうことはあんまり言わないでほしいってナーシヤ、前に言いましたよね？」

「ん？ そうだったっけか？」

「そうですねー……会ったばかりなのにいきなり天才だとか言われて、普通引きますから……」

「いや、別に平気だよナーシヤ」

眼前の、こんな少女が自分と同じかそれ以上の天才だとは、到底思えない。

が、それも先程の会話から推察するに事実なのだろう。専攻が創造 部門ならば魔道量子学と言えど 現象 を併用した場合のことに關してはそれほど多くを知らないはずだ。わからなかったとしても不思議ではない。

「いえ、いいんですよメルさん。ナーシヤ、拒絶されるのには慣れてますから」

「いや、ホントの話。だって、僕もそうだから」

「はい？」「へ？」

メルの一言に、カーラー兄妹の表情が驚愕に固まる。行動まで完全に停止し、空中でぶらぶらしていたナーシヤの足、背もたれをぎしぎし言わせていたハーヴェイの背、それらが完全に止まったままとなる。

「ちよつと待てメル……」

「ええちよつと待つてくださいメルさん」

再び稼働を開始したカーラー兄妹が、ぎこちないながらも身を乗り出してメルへ。

「天才……って言ったよね？」

「うん。少なくともそう呼ばれてる。ハーヴェイもわかるでしょ？」

一応あのときの近接戦闘は全力に近いものであったし、召喚にいたっては一切の手抜きをしていない。

「分野は？ 分野は何なんですか？」

「うーん……………一応全部一通りできるけど、一番得意なのは 召喚かな。最高が第一精霊域、高速詠唱でいけるから」

「ふえ！」

「……………マジかよ」

驚愕のあまり絶句する二人。

魔道三分野が一角、 召喚 にはランクがある。

まずは基本の一番下、僧侶域。これは過去、僧侶が生活の助けのために片手間に召喚していたという事実からつけられた名前で、基本的に鬼火や妖精火、虫や爬虫類といった、低魔力小型のものが多い。

その上に存在するのが幻獣域。小型から半大型までの魔力を持つものが分類される分野で、メルが召喚したガーゴイルなどはこの分野に入る。高い汎用性の割に召喚の難易度が低いので、主に利用されるのはこの分野となる。

そして、その上に存在するのが精霊域である。

主な召喚獣はその名の通り、 召喚 にて喚起される中では最高位に近い存在であり、各現象の基礎ともいえる存在、精霊である。当然ながらその難易度は非常に高いものがあり、 召喚 を専攻するもので六人に一人が到達できればいいほう、とまで言われるほどである。

さらに高速詠唱 詠唱の中から最低限必要な部分だけを抜き出した簡略詠唱となれば、難易度は格段に上昇する。

「いっぺん神聖域まで届きかけたんだけど、やっぱり高速詠唱じゃ無理があつて……………失敗したよ」

「メル……………お前、どんな化けモンだ？」

「そうですよ！ 神聖域なんて専用の媒介そろえて専門家が十分以上のなが〜い詠唱やって、代償も支払ってようやく成功するかしな

いかの領域なのに、それを高速詠唱なんて！　　ってことは普通にやったら……………」

「八割、かな」

「ひええ……………」

悲鳴のような声を上げるナターシャ。ハーヴェイはその様子をちらりと横目で見、そして納得したように頷いた。

「なるほどな……………」どーりで詠唱速度が半端じゃねえはずだぜ……………」

「ナターシャと同じ、ってわけか」

「そゆこと」

「でもでも、わかっちゃったらなんだか親近感わきますね」

打って変わったにこやかな表情で、ナターシャ。

「良かったら、時間ある時にちよつと　召喚　、教えてくれませんか？　わたし、　創造　は大得意なんですけどそのほかからつきし駄目で……………」いままで何度もハヴ兄に迷惑かけちゃって……………」

「一人じゃ火も起こせねえからな」

「はう……………」

猫のように縮こまるナターシャ。

なんとというか、可愛い。

「……………」ふふ、いいよ、ナターシャ」

「本当ですか!?!」

元気よく一言。

「うん、これ以上ハーヴェイの　現象　、上手くなられたら怖いし」

「ふええ……………」わかりましたか……………」

「わかりやすいよね、ナターシャって」

出来の悪い妹、その妹に代わって　現象　を使い続けた兄。その先にあるあまりにも明瞭な結果は兄の　現象　の上達だ。あのハーヴェイの　現象　の腕前も、昔からそういう環境で育ってきたのだとすれば納得できる。

「ところで、体は？ もう大丈夫なのか？」
いまさらながら、ハーヴェイがたずねてくる。

「まあ、一応は。薬さえ切らさなきゃ、あんな発作も起きないし」
「あ、そういえばいきなり吐血したって聞きましたけど、メル姉ってどんな病気なんですか？」

ああ、と一言、メルは呟き、

「たいしたことないよ。ただ単に、極端に感情が昂ぶったり魔力使用が過剰になったりすると体内の魔力バランスが総崩れになって内臓の一部が損傷する。それだけ」

「それだけ、って……………」

ハーヴェイの表情に陰が混じる。その陰に便乗するかのようになり、
「ナターシャも少し身を乗り出し、

「そうですねメル姉！ 内臓の擬似損傷症状って、魔力暴走の中じや命に関わる部類じゃないですか！ そんなのがお薬だけで治るとは思えま

「その目線がベッド脇の小机の上、そこにある小瓶に移動する。

「…………メル姉、ちょっとその瓶貸してくれますか？」

「中身はないけど…………どうぞ」

小机に腕を伸ばし、手のひらに収まる程度のピンを手渡す。ナターシャは黙ったままそのピンを受け取り、軽く傾けてそこにわずかに残っている薬を手の中へ滴下、匂いを確認し、指先に付着させてぺろりと短い下で舐め取り…………

「ひえっ！」

小さく悲鳴を上げて、飛びのいた。

そのまましばらく、わなわなと手の中の数滴の薬品を見つめ、

「メル姉！ これ、ホントにメル姉の薬なんですか？！」

「そうだけど……………」

「配合がむちゃくちゃです！ 確かに魔力増強効果と安定化の効果は目覚ましいですけど、これじゃあ効果出る前に普通なら倒れちゃいますよ！ どれだけ不安定なんですか!？」

「……………さあ」

「さあ、つて……………」

「わからないんだよ、記憶がないから」

ぴたりと、

まくし立てていたナターシャの勢いが、止まった。

「わからない？ それって……………」

うん、とメルは頷き、

「記憶喪失。どこで生まれたのか、どうしてこんなに上手く魔術が使えるのか、どうしてこんな病気を持つてるのか、知り合いはいるのか……………そういう事ばかりじゃなくて、自分が男なのか女なのかも、わからないんだよ」

唯一覚えていたのは、母の言葉。

『大丈夫よね？ メルは、男の子なんだから』

自らの性別が、確実に男であると断定できる根拠となった、その一言。

唯一所有していたのは、一本の長剣。寮の部屋に置かれている、メルの体格にしてはやや大きい琥珀色の刀身を持つ、幅広のもの。銘はなく、飾り気もない。そんな、わけのわからないものばかり。

「じゃあ、メルウッドさんは……………」

「うん、僕を拾ってくれた人。この町からちょっと山のほうへ行くと、湖があるんだ。その上流側から流されてきてたのを、拾ってくれたんだって」

「で、そのまま か」

「学院の費用とかはどうしてるんですか？」

「うん、実はここで働いてた時に向こうからお声がかかって、学費免除状態なんだよ。だから実質的にお金はかかってないよ」

笑みを交えたメルという言葉に二人の緊迫も解けたのか、ゆっくりと態度を軟化させ、

「……メル、お前ってなんかいろいろ反則だよな……」

「そう？」

「そうですよ。三分野一通り上級で出来るだけでも結構すごいのに、その上記憶喪失のハンデつきですよ？　メル姉、なんだかホントにすごいです」

「あ、ところでナターシャ」

はい？　とナターシャが首をかしげる。

「さつきから『メル姉』って僕のこと呼んでるけど………どうして？」

え？　と言葉を漏らす。

「いえ………なんだか親近感がわいちゃったからそう呼んでたんですけど　駄目ですか？」

「駄目って言うかなんと言うかね………」

どれだけ外見が女であろうとも、本質的にメルは男である。

「ひよっとしてメルさん、女性扱いされるの苦手なんでしょうか？」

「おう、それ俺も気になってた。話し方も男しゃべりだし、一人称も『僕』だろ？　つくづくもったいないって思ってたんだよな、俺」

「あ、ハヴ兄もですか？　確かにメルさん、結構綺麗な方ですよねー。髪も目も綺麗な瑠璃色ですし、なんだかお人形みたいです。ふわふわした服とか、よく似合いそうですよ」

「いや、二人ともちよっと待っ」

「ホントにもつたいないですよ、メルさん。どうせならそういう風な格好もしてみればいいのに………」

「だな。無理に、とはいわねえけど、呼ばれ方ぐらい女らしくてもいいんじゃないか？」

「……………だから僕は……………」

「……………やっぱり駄目ですか……………？」

ナターシャの、仔猫を思わせる目に射すくめられる。心の底から罪悪感を掻きたてる様な、それでいてみるものに『守ってやりたい』と思わせるような、つまるところは庇護欲をそそり、断ることに猛烈な罪悪感を抱かせるような、そんな感覚を抱かせるような目。

……………うっ。

内心でたじろぐ。動物好きな性質がこのときばかりは（微妙に）恨めしい。

「…………………………わかった。いいよ、ナターシャ」

その一言で、ナターシャの表情の中に満面の笑みが満ちた。

「わかりました、メル姉。あ、でしたらナーシャの事はぜひともナーシャとお呼びください！ そうでないと、なんだか違和感ありますから」

「はいはい」

いい、メルはゆっくりとベッドにもたれかかった。

夢から消え去った、温かさ。

それとは違えども、ここにはそれがある。

だから、今は。

それを痛感するのも、悪くないと思っていた。

それがたとえ、もうすぐ消えつせる運命にある幻想だとしても。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2463g/>

アトラフィリティ

2010年10月10日04時50分発行